

## 第5章

### 資料



# 横浜市感染症発生動向調査事業実施要綱

制定 平成12年11月27日衛感第340号

最近改正 平成18年6月12日健感第355号(局長決裁)

## 第1 趣旨及び目的

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」の施行に伴い、厚生労働省が定めた「感染症発生動向調査事業実施要綱」（以下「国要綱」という。）を基本に、横浜市において、感染症発生動向調査事業を実施するために必要な事項を定める。

## 第2 対象感染症

本事業の対象とする感染症は国要綱に定めるとおりとする。

## 第3 実施主体

実施主体は、健康福祉局感染症課、衛生研究所及び各区福祉保健センターとする。

## 第4 実施体制の整備

### 1 横浜市感染症情報センター

地方感染症情報センターとして横浜市感染症情報センター（以下「感染症情報センター」という。）を、衛生研究所感染症・疫学情報課内に設置する。感染症情報センターは、横浜市内における患者情報及び病原体情報を収集・分析し、健康福祉局感染症課（以下「健康福祉局」という。）及び各区福祉保健センターへ報告するとともに、全国情報と併せて、これらを速やかに医師会等の関係機関に提供・公開する。

### 2 指定届出機関（定点）

健康福祉局は、定点把握対象の五類感染症について、患者情報及び病原体情報を収集するため、患者定点及び病原体定点を選定し、神奈川県へ進達する。

### 3 横浜市感染症発生動向調査委員会

横浜市感染症発生動向調査委員会（以下「感染症委員会」という。）は、横浜市内における感染症に関する情報の収集、分析の効果的、効率的な運用を図るため、疫学等の専門家、福祉保健センター及び衛生研究所の代表、医師会の代表等をもって構成する。

感染症委員会の事務局は感染症情報センター及び健康福祉局とし、感染症委員会の運営については、横浜市感染症発生動向調査委員会設置運営要綱に定める。

## 第5 事業の実施

### 1 発生届その他の別記様式

国要綱の規定にかかわらず、本要綱で定めるものを用いることとする。

### 2 一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症及び全数把握対象の五類感染症

#### (1) 対象とする感染症患者等の状態

国要綱に定めるとおりとする。

## (2) 調査単位及び実施方法

### ア 診断した医師

国要綱に定めるとおりとする。

### イ 福祉保健センター

(ア) 当該届出を受けた福祉保健センターは、速やかに国が定める届出基準を参照し、届出の内容が合致するかどうか点検を行う。記載もれや不明な点は、届出を行った医師に確認し、必要に応じて、補記・補正を行い、感染症情報センター及び健康福祉局へ適切な方法により同時に連絡するとともに、当該医師に対し必要に応じて、病原体検査のための検体又は病原体情報の衛生研究所への提供について、別記様式2（全数）の検査票を添付して依頼するものとする。

(イ) 福祉保健センターは、感染症情報センターから情報提供のあった患者情報及び病原体情報について、各区の実情に応じて、関係機関に配布する。

なお、福祉保健センターにおいては、一類感染症、二類感染症及び三類感染症患者の届出があった場合には、地域の特性に応じた適切な方法を用いて、届出があった事実（個人情報に関する事項を除く）を前記の関係機関に連絡する。

### ウ 健康福祉局

健康福祉局は、福祉保健センターから別記様式1-1～1-57、5-3、57の2の送信があった場合、直ちに、内容の点検等を行ったうえで、感染症情報センターと連絡もれがないか等、確認する。

### エ 感染症情報センター

(ア) 感染症情報センターは、福祉保健センターから得た別記様式1-1～1-57、5-3、57の2の患者情報のうち、感染症発生動向調査に必要な項目をコンピュータ・オンラインシステムにより、中央感染症情報センターへ伝送する。

(イ) 感染症情報センターは、横浜市域内の全ての患者情報及び病原体情報（検査情報を含む。）を収集、分析するとともに、その結果を週報（月単位の場合は月報）等として公表される都道府県情報、全国情報と併せて、福祉保健センター、指定医療機関その他の関係医療機関、医師会、教育委員会等の関係機関に提供・公開する。

### オ 衛生研究所

(ア) 衛生研究所は、別記様式2（全数）の検査票及び検体又は病原体情報が送付された場合にあっては、当該検体を検査し、その結果を別記様式2-3（全数）により福祉保健センターに送付するとともに、福祉保健センターを経由して診断した医師に別記様式2-4（全数）により通知する。また、感染症発生動向調査に必要な項目をコンピュータ・オンラインシステムにより、中央感染症情報センターへ伝送する。

(イ) 検査のうち、衛生研究所において実施することが困難なものについては、必要に応じて国立感染症研究所に検査を依頼する。

(ウ) 衛生研究所は、患者が一類感染症と診断されている場合、横浜市域を超えた集団発生があった場合等の緊急の場合にあっては、厚生労働省健康局結核感染症課からの依頼に基づき、検体を国立感染症研究所に送付する。

### 3 定点把握対象の五類感染症

#### (1) 対象とする感染症の状態

国要綱に定めるとおりとする。

#### (2) 定点の選定

##### ア 患者定点

定点把握対象の五類感染症の発生状況を地域的に把握するため、健康福祉局は次の点に留意し、医師会等の協力を得て、医療機関の中から可能な限り無作為に患者定点を選定する。

(ア) 人口及び医療機関の分布等を勘案して、できるだけ横浜市全体の感染症の発生状況を把握できるよう考慮すること。

(イ) 患者定点の種類、その対象疾患及び定点数については、国要綱に定めるとおりとすること。

##### イ 病原体定点

病原体の分離等の検査情報を収集するため、横浜市は、病原体定点を選定する。この場合においては、次の点に留意する。

(ア) 原則として、患者定点として選定された医療機関の中から選定すること。

(イ) 病原体定点の種類、その対象疾患及び定点数については、国要綱に定めるとおりとすること。

#### (3) 調査単位等

国要綱に定めるとおりとする。

#### (4) 実施方法

##### ア 患者定点

(ア) 患者定点として選定された医療機関は、速やかな情報提供を図る趣旨から、調査単位の期間の診療時における国が定める報告基準により、患者発生状況の把握を行うものとする。

(イ) (2)のアの(イ)により選定された各定点においては、小児科定点は別記様式1-58により、インフルエンザ定点においては別記様式1-59により、眼科定点においては別記様式1-60により、性感染症定点においては別記様式1-61により、基幹定点においては別記様式1-62により、それぞれ調査単位の患者発生状況等を記載する。

(ウ) 別記様式1-58～1-61までによる患者情報については、ファクシミリにより福祉保健センターへの発送を行うものとする。

##### イ 病原体定点

(ア) 病原体定点として選定された医療機関は、国の定める病原体検査指針により、微生物学的検査のために検体を採取する。

(イ) 病原体定点で採取された検体は、別記様式2(定点)の検査票を添えて、速やかに衛生研究所へ送付する。

##### ウ 福祉保健センター

(ア) 福祉保健センターは、患者定点から得られた患者情報(別記様式1-58～1-61)を、調査単位が週単位の場合は調査対象の週の翌週の火曜日までに、月単位の場合は調査対象月の翌月の3日までに、感染症情報センターへ適切な方法

により連絡する。

また、対象感染症についての集団発生その他特記すべき情報についても健康福祉局及び感染症情報センターへ報告する。

(イ) 福祉保健センターは、感染症情報センターから情報提供のあった患者情報及び病原体情報について、各区の実情に応じて、関係機関に配布する。

#### エ 衛生研究所

(ア) 衛生研究所は、別記様式2（定点）の検査票及び検体が送付された場合にあっては、当該検体を検査し、その結果を病原体情報として、その結果を別記様式2-③（定点）により病原体定点に通知するとともに、感染症発生動向調査に必要な病原体情報をコンピュータ・オンラインシステムにより、中央感染症情報センターへ伝送する。

(イ) 検査のうち、衛生研究所において実施することが困難なものについては、必要に応じて国立感染症研究所に検査を依頼する。

(ウ) 衛生研究所は、横浜市域を超えた集団発生があった場合等の緊急の場合にあっては、厚生労働省健康局結核感染症課からの依頼に基づき、検体を国立感染症研究所に送付する。

#### オ 感染症情報センター

(ア) 感染症情報センターは、福祉保健センターから患者情報の連絡があり次第、コンピュータ・オンラインシステムにより、中央感染症情報センターへ伝送する。

(イ) 感染症情報センターは、横浜市域内の全ての患者情報及び病原体情報を収集、分析するとともに、その結果を週報（月単位の場合は月報）等として公表される都道府県情報、全国情報と併せて、福祉保健センター等の関係機関に提供・公開する。

### 4 積極的疫学調査

国要綱に定めるとおりとする。

## 第6 その他

本実施要綱に定める事項以外の内容については、必要に応じて健康福祉局長が定めることとする。

なお、感染症発生動向調査事業については、本要綱に基づき実施することとし、結核発生動向調査事業については、従来の「横浜市結核・感染症発生動向調査事業実施要綱」に基づき実施することとする。

#### 附 則

(施行期日)

1 この実施要綱は、平成15年11月5日から施行する。

#### 附 則

この要綱は、平成18年4月1日から施行する。

#### 附 則

この要綱は、平成18年6月12日から施行する。

# 別記様式一覧表

別記様式 1-1	エボラ出血熱発生届
別記様式 1-2	クリミア・コンゴ出血熱発生届
別記様式 1-3	重症急性呼吸器症候群(病原体が SARS コロナウイルスであるものに限る)発生届
別記様式 1-4	痘そう発生届
別記様式 1-5	ペスト発生届
別記様式 1-6	マールブルグ病発生届
別記様式 1-7	ラッサ熱発生届
別記様式 1-8	急性灰白髄炎発生届
別記様式 1-9	コレラ発生届
別記様式 1-10	細菌性赤痢発生届
別記様式 1-11	ジフテリア発生届
別記様式 1-12	腸チフス発生届
別記様式 1-13	パラチフス発生届
別記様式 1-14	腸管出血性大腸菌感染症発生届
別記様式 1-15	E型肝炎発生届
別記様式 1-16	ウエストナイル熱(ウエストナイル脳炎を含む)発生届
別記様式 1-17	A型肝炎発生届
別記様式 1-18	エキノコックス症発生届
別記様式 1-19	黄熱発生届
別記様式 1-20	オウム病発生届
別記様式 1-21	回帰熱発生届
別記様式 1-22	Q熱発生届
別記様式 1-23	狂犬病発生届
別記様式 1-24	高病原性鳥インフルエンザ発生届
別記様式 1-25	コクシジオイデス症発生届
別記様式 1-26	サル痘発生届
別記様式 1-27	腎症候性出血熱(HFRS)発生届
別記様式 1-28	炭疽発生届
別記様式 1-29	つつが虫病発生届
別記様式 1-30	デング熱発生届
別記様式 1-31	ニパウイルス感染症発生届
別記様式 1-32	日本紅斑熱発生届
別記様式 1-33	日本脳炎発生届
別記様式 1-34	ハンタウイルス肺症候群(HPS)発生届
別記様式 1-35	Bウイルス病発生届
別記様式 1-36	ブルセラ症発生届
別記様式 1-37	発しんチフス発生届
別記様式 1-38	ボツリヌス症発生届
別記様式 1-39	マラリア発生届

別記様式 1-40	野兔病発生届
別記様式 1-41	ライム病発生届
別記様式 1-42	リッサウイルス感染症発生届
別記様式 1-43	レジオネラ症発生届
別記様式 1-44	レプトスピラ症発生届
別記様式 1-45	アメーバ赤痢発生届
別記様式 1-46	ウイルス性肝炎（E型肝炎及びA型肝炎を除く）発生届
別記様式 1-47	急性脳炎（ウエストナイル脳炎及び日本脳炎を除く）発生届
別記様式 1-48	クリプトスポリジウム症発生届
別記様式 1-49	クロイツフェルト・ヤコブ病発生届
別記様式 1-50	劇症型溶血性レンサ球菌感染症発生届
別記様式 5-3	後天性免疫不全症候群発生届
別記様式 1-51	ジアルジア症発生届
別記様式 1-52	髄膜炎菌性髄膜炎発生届
別記様式 1-53	先天性風しん症候群発生届
別記様式 1-54	梅毒発生届
別記様式 1-55	破傷風発生届
別記様式 1-56	バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症発生届
別記様式 1-57	バンコマイシン耐性腸球菌感染症発生届
別記様式 57の2	高病原性鳥インフルエンザ発生届及びインフルエンザ（H5N1）発生届
別記様式 1-58	五類感染症（定点把握対象）小児科患者定点報告票
別記様式 1-59	五類感染症（定点把握対象）インフルエンザ患者定点（内科定点）報告票
別記様式 1-60	五類感染症（定点把握対象）眼科患者定点報告票
別記様式 1-61	五類感染症（定点把握対象）性感染症患者定点報告票
別記様式 1-62	五類感染症（定点把握対象）基幹患者定点（週報）報告票
別記様式 1-63	五類感染症（定点把握対象）基幹患者定点（月報）報告票
別記様式 2-1（全数・医療機関控）	一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症及び五類感染症検査票 （病原体）
別記様式 2-2（全数・福祉保健センター控）	一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症及び五類感染症検査票 （病原体）
別記様式 2-3（全数・福祉保健センターあて検査結果通知用）	一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症及び五類感染症検査票 （病原体）
別記様式 2-4（全数・医療機関あて検査結果通知用）	一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症及び五類感染症検査票 （病原体）
別記様式 2-①（定点・医療機関控）	感染症発生動向調査における病原体定点からの検査依頼書
別記様式 2-②（定点・衛生研究所控）	感染症発生動向調査における病原体定点からの検査依頼書
別記様式 2-③（定点・医療機関あて検査結果通知用）	感染症発生動向調査における病原体定点からの検査依頼書

# 横浜市感染症発生動向調査委員会設置運営要綱

制定 平成 12 年 11 月 27 日衛感第 340 号

最近改正 平成 18 年 3 月 10 日衛感第 10396 号(局長決裁)

## (設置)

第 1 条 横浜市内における感染症に関する情報の収集、分析の効果的、効率的な運用を図るため、横浜市感染症発生動向調査委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

## (所掌事務)

第 2 条 委員会は、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（平成 10 年法律第 114 号。以下「法」という。）第 16 条の規定に基づき、法第 12 条から第 15 条までの規定により収集した感染症に関する情報について分析を行い、感染症の予防のための情報を積極的に公表する。

## (組織)

第 3 条 委員会は、委員 6 人をもって組織する。

2 委員は、次の各号に掲げる者のうちから健康福祉局長が任命する。

- (1) 学識経験者
- (2) 横浜市医師会を代表する者
- (3) 福祉保健センター及び衛生研究所の代表

## (委員の任期)

第 4 条 委員の任期は、3 年とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 委員は、再任されることができる。

## (委員長及び副委員長)

第 5 条 委員会に、委員長及び副委員長 1 人を置く。

2 委員長及び副委員長は、委員の互選によって定める。

3 委員長は、委員会を代表し、会務を総理し、会議の議長となる。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(招集)

第6条 委員会の会議は、委員長が毎月1回、その他必要に応じて招集する。

(議事の運営)

第7条 委員会の会議は、委員の半数以上の出席がなければ開くことができない。ただし、緊急その他やむを得ない理由があるときはこの限りでない。

(関係者の出席等)

第8条 委員長は、委員会において必要があると認めるときは、関係者の出席を求めてその意見若しくは説明を聴き、又は関係者から必要な資料の提出を求めることができる。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、健康福祉局において処理する。

(その他)

第10条 本要綱に定める他、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附 則

(施行期日)

1 この要綱は、平成14年1月1日から施行する。

(経過措置)

2 この要綱の施行後最初の委員会の会議は、衛生局長が召集する。

附 則

この要綱は、平成18年4月1日から施行する。

平成 19 年 1 月期

## 横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成 19 年 1 月 25 日  
横浜市健康福祉局感染症課  
TEL045(671)2463  
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課  
TEL045(754)9816

### 《今月のトピックス》

- A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の発生が数年来で最多、立ち上がりも早い
- インフルエンザは、増加傾向で、磯子区、金沢区等で流行期に入る
- 感染性胃腸炎は、昨年末大きく流行したが、例年並みに落ち着く

平成 18 年 12 月 18 日から平成 19 年 1 月 21 日まで(平成 18 年第 51 週から平成 19 年第 3 週まで。ただし、性感染症については平成 18 年 12 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

### 平成 18～19 年 週—月日対照表

第 51 週	12 月 18～24 日
第 52 週	12 月 25～31 日
第 1 週	平成 19 年 1 月 1～7 日
第 2 週	1 月 8～14 日
第 3 週	1 月 15～21 日

**1 インフルエンザ:**第 1 週に 8 人、第 2 週に 18 人の報告でしたが、第 3 週に入り 84 人と増えてきました。全体では定点あたり 0.71 とまだ流行期とは言えませんが、鶴見、南、磯子、金沢、瀬谷では、流行期の目安となる 1.0 以上となっています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 0.71 と横浜と同様で、川崎市は 0.26、東京都は 0.60 と横浜市より少ない値でしたが、全国では流行期に入ったようです。今後の動向には注意が必要と思われます。

横浜市内の病原体定点からの第 3 週までのウイルス分離・検出状況は、A ソ連型 1、A 香港型 5、B 型 4 となっています。全国の地方衛生研究所からのウイルス分離報告は、1 月 23 日現在で、A ソ連型 14、A 香港型 30、B 型 33 でした。

また、市内での集団かぜによる学級閉鎖は、まだありません。東京都では、今シーズン初めて、小学校でインフルエンザ様疾患による学級閉鎖があったようです。

**2 RS ウイルス感染症:**12 月は、第 49 週に 11 人、第 50 週に 28 人、第 51 週に 37 人、第 52 週に 34 人とかなり多くの報告がありましたが、1 月に入ってから、第 1 週が 4 人、第 2 週が 18 人、第 3 週が 6 人と減少しています。第 3 週については、川崎市は 3 人と少ない報告でしたが、神奈川県(横浜、川崎を除く)は 40 人、全国でも多く報告されているようですので、まだしばらく注意が必要です。

病原体定点から採取された検体からは、衛生研究所で、12 月に 22 例、1 月に 10 例、PCR で検出されています。

**3 A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎:**第 3 週に急に増加してきて、定点あたり 1.81 と、過去 5 年と比べて一番高い値になりました。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 1.81、川崎市は 2.79 と、どちらも 12 月同様、横浜市より高い値でした。昨年も、1 月から増え始め、2、3 月と、数年来で最多の発生となりましたが、今年は、さらに立ち上がりも早いようなので、注意が必要です。都筑区での発生が目立っていて、1 区だけ警報開始基準の 4 を超えています。

**4 感染性胃腸炎:**昨年末は、大きく流行しましたが、1 月に入ってから、ほぼ例年並みで、第 3 週は定点あたり 6.83 と落ち着いています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 7.40、川崎市は 7.36 で、どちらも横浜市より少し高くなっています。

5 **伝染性紅斑**:11～12月にかけて、少し高い値が続いていました。第3週は定点あたり0.60と、ここ数年の中では高めの値でした。全国では、第40週以降年末まで増加が続いていました。

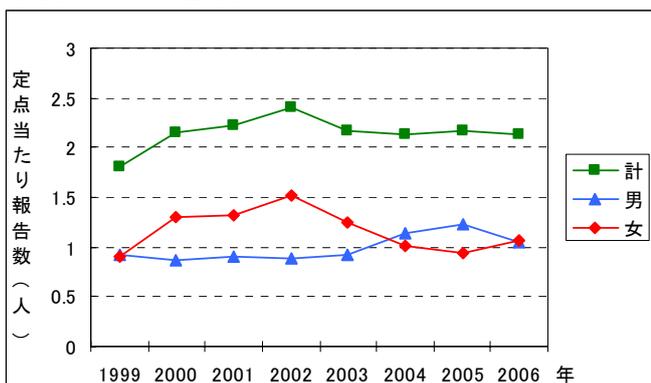
6 **マイコプラズマ肺炎**:3か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年はかなり報告が多く、年間で92人と、2005年の16人の5倍以上でした。1月に入ってから、第2週に1人、第3週に3人と報告があり、全国での報告も例年より多い状態が続いているようなので、引き続き今後の動向に注意が必要と思われます。

7 **性感染症**:性感染症は、診療科で見ると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

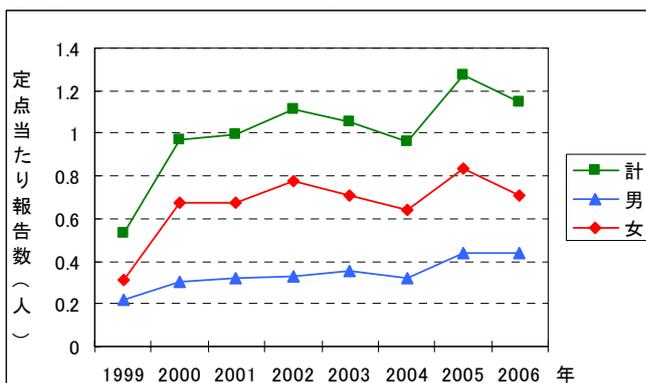
12月は、性器クラミジア感染症は定点あたり2.0と、11月より増加し、昨年に比べても高い値でした。性器ヘルペス感染症と淋菌感染症は11月より減少し、昨年よりかなり低い値でした。尖圭コンジローマは、11月よりわずかに増加しましたが、昨年よりは低い値です。

以下に、1999年～2006年までの4つの疾患の推移をグラフで示しました。

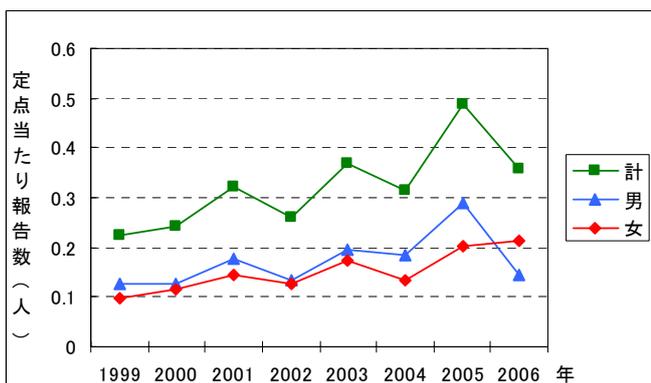
性器クラミジア感染症



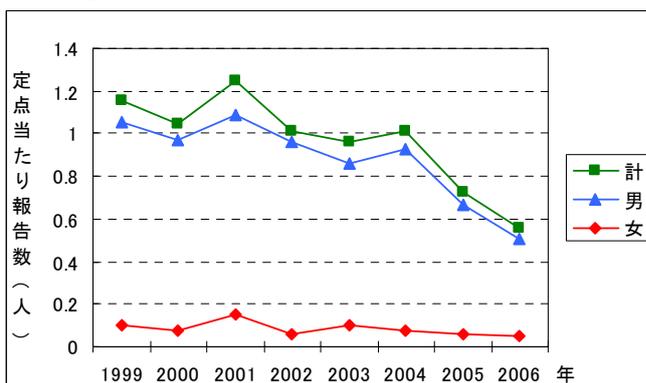
性器ヘルペスウイルス感染症



尖圭コンジローマ



淋菌感染症



この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。  
 横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

《今月のトピックス》

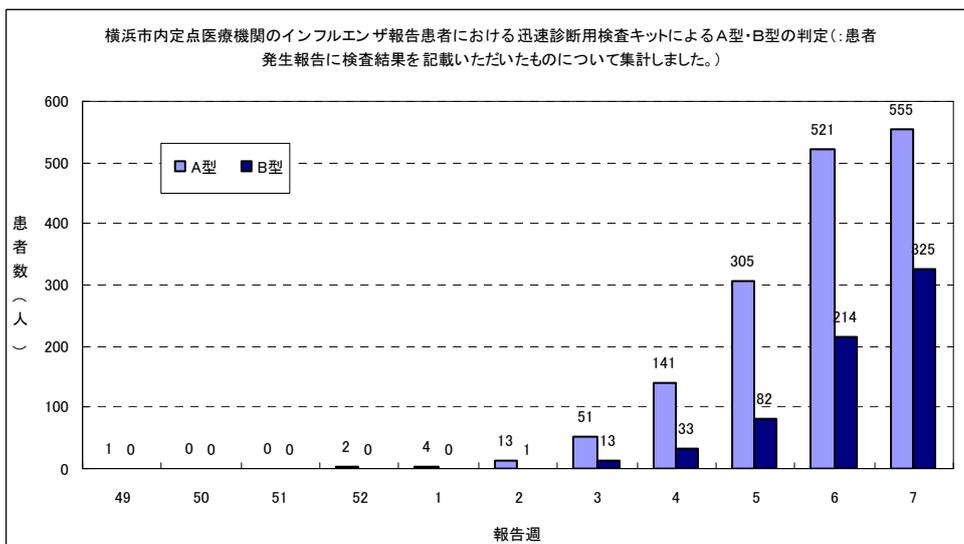
- インフルエンザは、流行期に入り、増加中
- A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、減少は見られるが、まだ動向に注意が必要
- RS 感染症の報告は、減少傾向

平成 19 年 1 月 15 日から平成 19 年 2 月 18 日まで(平成 19 年第 3 週から第 7 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 1 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

第 3 週	1 月 15～21 日
第 4 週	1 月 22～28 日
第 5 週	1 月 29～ 2 月 4 日
第 6 週	2 月 5～11 日
第 7 週	2 月 12～18 日

**1 インフルエンザ:**横浜市では、第 4 週に定点あたり 1.69 と、1.0 をこえ、過去 5 シーズンと比べて一番遅い流行開始となりました。その後増加を続け、第 7 週は定点あたり 9.22 でした。区別では、第 6 週は 6 区、第 7 週は半数にあたる 9 区で注意報レベルをこえています。港北 17.4、都筑 16.4、瀬谷 15.7 で特に高い値でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 13.83、東京都は 9.41 と横浜より高く、川崎市は 7.41 と低い値です。全国では第 3 週に流行期に入り、その後も増加を続けており、第 6 週で定点あたり 9.95 でした。今後の動向には注意が必要と思われます。

横浜市内の病原体定点の検体からの、横浜市衛生研究所における第 7 週までのウイルス分離・検出数は、A ソ連型 4、A 香港型 24、B 型 10 となっています。全国の地方衛生研究所からの報告によれば、2 月 22 日現在、A ソ連型 39、A 香港型 311、B 型 176 です。横浜市では今年より、定点医療機関からの届出様式にインフルエンザ迅速診断キット報告欄を設け、任意でご記入いただいております。現在までの報告数を図に示しました。合計数を比べると、A 型:B 型が約 2.4:1 で、当所での分離・検出の合計数の比 2.8:1 に近い値になっていました。



2 月 8、9 日の 2 日間、横浜市内において、今シーズン初めて、2 つの小学校で、集団かぜによる学級閉鎖が行われました。市内での集団かぜによる学級閉鎖は、2 月 22 日現在、累計で 8 施設となっています。小学校が 6 校、中学校が 2 校で、中学校の 1 校が学年閉鎖、残りの 7 校は学級閉鎖です。

2 **RSウイルス感染症**:12月はかなり多くの報告がありましたが、1月に入ってから、第2週の18人、第4週の15人を除き1けたの報告数に減少し、第7週は2人でした。全国でも、第5週以降減少しています。

3 **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎**:第3週に急に増加し、過去5年と比べて一番高い値で増加していましたが、第5週の定点あたり2.29をピークに2週続けて減少し、第7週は1.52と、高い値が続いていた昨年よりも低くなりました。都筑区での発生が目立っていましたが、第6週以後は警報開始基準の4を下回っています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.97、川崎市は3.70です。全国では、第2、3週と急激に増加し、第6週は2.62でした。

4 **感染性胃腸炎**:昨年末は、大きく流行しましたが、1月に入ってから、ほぼ例年並みでの横ばいが続き、第7週は定点あたり7.34です。区別では、戸塚17.2、緑14.8、旭11.8とまだ10以上の区が見られています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は7.49、川崎市は7.48と、どちらも横浜市より少し高くなっています。

5 **伝染性紅斑**:第3週は定点あたり0.60、第4週は0.68と、ここ数年の中では高めの値が続きましたが、その後は減少傾向で、第7週は0.28でした。川崎市は0.76と高い値です。全国では、第3週の0.77をピークに少し減少してきていますが、第6週で0.61と、過去5年間の同時期と比較してかなり高くなっています。

6 **マイコプラズマ肺炎**:3か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年はかなり多く、年間で92人の報告がありました。1月に入ってから、第2週に1人、第3、4、7週にそれぞれ3人の報告がありました。全国での報告は、過去5年間と比較してかなり多い状態が昨年から続いており、引き続き今後の動向に注意が必要と思われます。

7 **性感染症**:性感染症は、診療科で見ると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

1月は、性器クラミジア感染症が定点あたり2.82と、12月より増加し、昨年の1月に比べてかなり高い値でした。他の3疾患については、大きな変化は見られませんでした。

平成19年2月7日のエイズ動向委員会委員長コメントで、平成18年年間報告(速報値)についても発表がありましたので、横浜市のデータと合わせて下の表に示します。全国では、新規HIV患者、新規エイズ患者、合計数の全てで、昨年までの速報値及び確定値と比較して、過去最高を記録しました。

	全国(速報値)		横浜市	
	平成18年	平成17年	平成18年	平成17年
新規HIV感染者(人)	914	778	18	18
新規AIDS患者(人)	390	346	11	10
合計(人)	1304	1124	29	28
検査件数注(件)	116550	100287	4432	3601

注)検査件数とは、「保健所等におけるHIV抗体検査件数」のことです

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。  
 横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

平成 19 年 3 月期

## 横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成 19 年 3 月 29 日  
横浜市健康福祉局感染症課  
TEL045(671)2463  
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課  
TEL045(754)9816

### 《今月のトピックス》

- インフルエンザは、注意報レベルを超えて増加を続けたが、第 12 週はやや減少
- A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、高いレベルで推移し、引き続き注意が必要
- 全国では、マイコプラズマ肺炎が昨年に引き続き多い

平成 19 年 2 月 19 日から平成 19 年 3 月 25 日まで(平成 19 年第 8 週から第 12 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 2 月分の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

### 平成 19 年 週—月日対照表

第 8 週	2 月 19～25 日
第 9 週	2 月 26～3 月 4 日
第 10 週	3 月 5～11 日
第 11 週	3 月 12～18 日
第 12 週	3 月 19～25 日

**1 インフルエンザ:**横浜市では、今シーズンは、過去 5 シーズンと比べて一番遅い第 4 週から、流行期に入りました。その後増加を続け、第 8 週には定点あたり 14.3 と、注意報レベルを超え、第 11 週は定点あたり 26.80 になりました。第 12 週は 23.87 とやや減少し、そろそろピークをこえたようにも思われます。ただ、過去 10 年でもこの時期に 2 ケタだったことはなく、まだ非常に高い値なので、引き続き注意が必要です。区別では、都筑 49.6、磯子 37.0、港北 32.1 と 3 区で警報レベルを超え、20 以上が 8 区、10 以上が 6 区と、中区以外の 17 区で注意報レベルを超えており、市全体で流行しています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 27.55、川崎市は 28.65 と横浜より高く、東京都は 22.08 と低い値です。全国では第 3 週の流行開始以降増加が続き、第 11 週は定点あたり 32.94 でした。

横浜市内の病原体定点の検体からの、横浜市衛生研究所における第 13 週までのウイルス分離・検出数は、A ソ連型 7、A 香港型 49、B 型 50 となっています。全国の地方衛生研究所からの報告によれば、3 月 29 日現在、A ソ連型 177、A 香港型 1215、B 型 897 です。横浜市では今年より、定点医療機関からの届出様式にインフルエンザ迅速診断キット報告欄を設け、任意でご記入いただいております。現在までの合計数を比べると、A 型:B 型が約 1.15:1 で、当所での分離・検出の合計数の比 1.12:1 に近い値になっていました。

また市内での集団かぜによる学級閉鎖については、3 月 15 日現在で幼稚園 1、小学校 10、中学校 3、養護学校 1 の累計 15 施設となっています。内訳は、学年閉鎖が 2 学年 8 学級、学級閉鎖が 23 学級です。それ以降報告はありません。

**2 RS ウイルス感染症:**12 月はかなり多くの報告がありましたが、今年に入って減少し、2 月以降は、第 5 週の 11 人、第 9 週の 8 人が目立った他は、1 人前後しか報告がなく、流行は終息したと思われます。全国でも、第 5 週以降減少を続けています。

**3 咽頭結膜熱:**横浜市では、昨年と同様、例年よりやや高めで横ばいが続いており、第 12 週は定点あたり 0.23 でした。区別では、2.3 と磯子区での発生が目立ちました。川崎市は、1.0 でかなり高い値です。昨年、立ち上がりが早く大きな流行があったので、今後の動向には注意が必要と思われます。

**4 A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎:**第 3 週に急に増加し、その後も高いレベルで増減を繰り返し、第 10 週には定点あたり 2.68、第 12 週は 2.13 でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 2.45、川崎市は 3.06 と、どちらも横浜市より高い値です。区別では、都筑区での発生が目立ち、第 8 週以降警報レベルの 4 以上が続いており、第 12 週は 9.5 でした。他には、磯子 5.3、泉 4.7 が高くなっています。全国でも昨年同様高い値が続いており、引き続き注意が必要です。

平成 19 年 週一月日対照表

第 8 週	2 月 19～25 日
第 9 週	2 月 26～3 月 4 日
第 10 週	3 月 5～11 日
第 11 週	3 月 12～18 日
第 12 週	3 月 19～25 日

5 **感染性胃腸炎**: 昨年末は、大きく流行しましたが、今年に入ってから落ち着いた、例年通りの発生となっています。第 12 週は定点あたり 5.26 と、神奈川県(横浜、川崎を除く)、川崎市、東京都より低い値になっています。定点あたりの値が 10 以上の区も見られません。

6 **伝染性紅斑**: 例年に比べて高めの値が続いており、第 12 週は 0.45 と、過去の同時期と比べると一番高い値です。全国では、増減はあるものの、過去 5 年間の同時期と比較してかなり高い値が続いていて、第 11 週は定点あたり 0.63 でしたので、今後の動向には注意が必要です。

7 **マイコプラズマ肺炎**: 3 か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年よりはかなり多く、年間で 92 人の報告がありました。今年に入ってから、第 2 週に 1 人、第 3、4、7 週にそれぞれ 3 人、第 8 週に 2 人の報告がありました。全国での報告は、増減はあるものの、過去 5 年間で比較してかなり多い状態が続いており、引き続き今後の動向に注意が必要と思われる。

8 **性感染症**: 性感染症は、診療科で見ると産婦人科系(産婦)の 11 定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の 15 定点からの報告に基づいて集計されています。

2 月は、4 つの疾患とも、1 月より減少しています。性器クラミジア感染症と性器ヘルペス感染症では、男性の報告数が女性の約 2 倍と多い点が目立ちました。

いわゆる「エイズ予防指針」については、平成 18 年 3 月に改正され 4 月から適用されています。少し遅れて、「性感染症に関する特定感染症予防指針」についても一部改正され、平成 18 年 11 月 30 日より適用されました。2006 年 8 月の本報告でも、改正案についてのパブリックコメント募集を取り上げています。概要としては、以下の点が注目されます。

- ・ 前文に若年層を中心とした予防対策を重点的に推進していく必要があるとしたこと
- ・ 発生動向が的確に反映できるよう、国は指定届出機関の指定の基準の見直しに努め、都道府県は関係機関と連携し、地域によって偏りがないように留意して指定届出基幹を指定するとしたこと
- ・ コンドームは、性感染症の予防に対する確実かつ基本的な効果を有するものとし、産婦人科、泌尿器科等の医療機関において、性感染症に係る受診の機会を捉え、コンドームの使用による性感染症の予防について啓発していく必要があるとしたこと
- ・ 性感染症として最も罹患の可能性の高い性器クラミジア感染症は、男性においても症状が軽微であることが多いため、そのまん延防止に向けた啓発が必要であるとしたこと
- ・ 性感染症の無症状病原体保有者の推移に関する研究、地域を限定した性感染症の全数調査等の、研究についても重要であるとしたこと

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

《今月のトピックス》

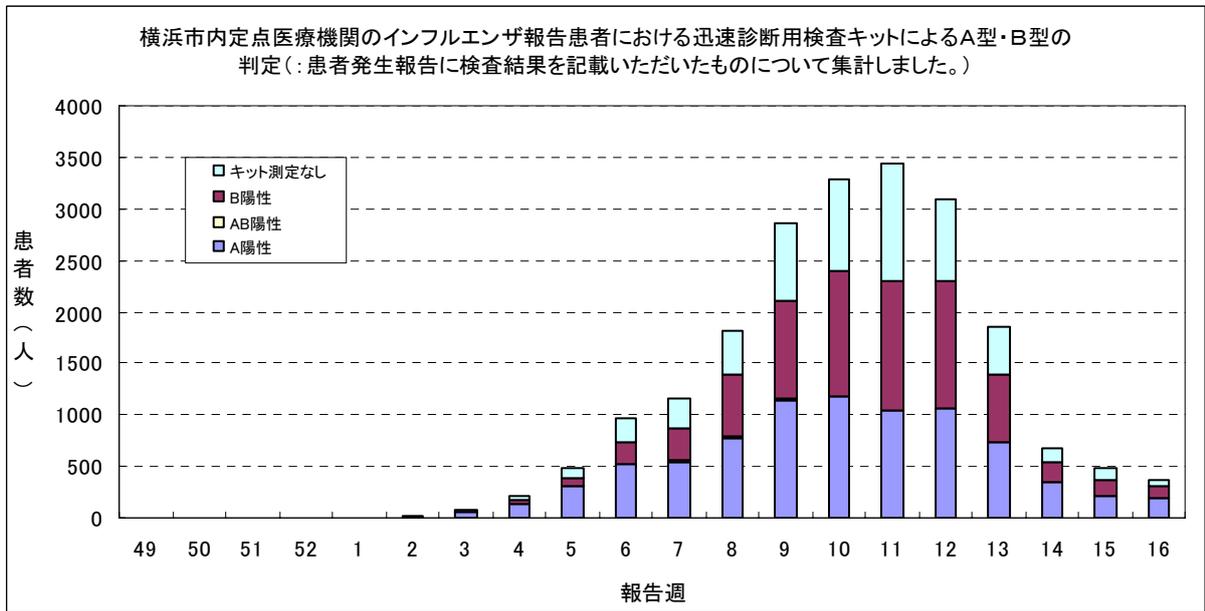
- インフルエンザは、終息に向かっているが、この時期としてはまだ発生が多い
- 東京、埼玉で麻しんが流行、横浜でも発生が増加しており、流行拡大に注意

平成 19 年 3 月 19 日から平成 19 年 4 月 22 日まで(平成 19 年第 12 週から第 16 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 3 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成 19 年 週—月日対照表	
第 12 週	3 月 19～25 日
第 13 週	3 月 26～4 月 1 日
第 14 週	4 月 2～ 8 日
第 15 週	4 月 9～15 日
第 16 週	4 月 16～22 日

**1 インフルエンザ:** 定点あたり患者報告数は、第 11 週の 26.8 をピークに減少を続け、第 16 週は、3.28 でした。横浜市におけるインフルエンザの流行は、ほぼ終息に向かっていると思われます。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 3.30、川崎市は 2.79 と同様に低くなっています。ただ、今までに、第 16 週で 1.0 を下回らなかった年はありませんでした。また、全国は第 15 週で 7.1 と高いので、まだ注意は必要です。

横浜市内の病原体定点の検体からの、横浜市衛生研究所における第 16 週までのウイルス分離・検出数は、A 型 7、A 香港型 59、B 型 58 となっています。全国の地方衛生研究所からの報告によれば、4 月 25 日現在、A 型 273、A 香港型 1704、B 型 1450 です。



以前より、定点報告の際、インフルエンザ迅速診断キットの結果をご記入していただく場合があります。今年からは、任意ですが、届出様式に報告欄を設けました。のべ報告数のうち、ご記入いただいている割合が、今シーズンは約 40%で、昨年(15%)、一昨年(10%弱)に比べ、増加しました。

**2 咽頭結膜熱:** 横浜市では、昨年と同様、例年よりやや高めで、定点あたり 0.25 前後の横ばい状態が続いていて、第 16 週は定点あたり 0.34 と少し増加しました。区別では、定点あたり 2.5 と相変わらず磯子区での発生が目立っています。港北区も 1.8 と、先月に比べてかなり増加しました。昨年は、4 月末から 5 月初めの早い時期に立ち上がり、大きな流行があったので、今後の動向には注意が必要と思われます。

平成 19 年 週一月日対照表

第 12 週	3 月 19～25 日
第 13 週	3 月 26～4 月 1 日
第 14 週	4 月 2～8 日
第 15 週	4 月 9～15 日
第 16 週	4 月 16～22 日

3 **A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎:**第 3 週に急に増加し、高いレベルで増減を繰り返していました。第 13～14 週は減少しましたが、また少し増加し、第 16 週は定点あたり 1.57 でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 2.06、川崎市は 2.34 と、どちらも横浜市より高い値です。区別では、都筑区での発生が目立ち、警報レベルの 4 をこえる週が多く、第 15 週は 13.0 でしたが、第 16 週は 3.0 と減少しています。全国でも昨年同様高い値が続いており、第 12 週からは減少していましたが、第 15 週は 1.60 とまた少し増加しています。引き続き注意が必要です。

4 **伝染性紅斑:**例年に比べて高めの値が続いていましたが、第 16 週は定点あたり 0.57 と、例年並みの値でした。全国では、増減はあるものの、過去 5 年間の同時期と比較してかなり高い値が続いていて、第 15 週は定点あたり 0.63 でした。例年、6 月頃が一番高いようなので、今後の動向には注意が必要です。

5 **麻疹:**現行の感染症発生動向調査では、2001 年をピークに減少、2004 年に激減、2006 年は、全国で 520 人、横浜市では 16 人という年間患者報告数でした。(下記麻疹年間患者報告数の表を参照)

	1999(年)	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
横浜市	130	236	533	278	174	18	10	16
全国	5875	22552	33812	12473	8285	1547	537	520

しかし、2006 年の 4～6 月には、関東を中心とした麻疹の流行が報告されました。2007 年に入って、全国的には過去 2 年と同様に低い状態が続いていますが、関東での発生は継続していました。

国立感染症研究所から、南関東における麻疹の流行についてのコメントが出たのを受け、4 月 17 日新聞で「はしか、東京や埼玉で流行拡大の恐れ、注意呼びかけ」との報道がされました。その後、東京都では、大学での集団感染も報告されています。

感染症発生動向調査においては、麻疹は小児科定点から報告され、届出基準では、15 歳以上は除くとなっており、一方、成人麻疹(15 歳以上)は基幹定点(病院)から報告されることになっています。ただ、成人麻疹の患者が、基幹定点ではなく内科・小児科を受診する場合もあり、その場合は、小児科定点の報告に記載されてきます。

横浜市では、2007 年は、第 3 週に 1 人(10～14 歳)報告があつて以降は、ずっとありませんでしたが、第 14 週に 3 人(6～11 歳 2 人、1 歳 1 人)、第 15 週に 2 人(10～14 歳 1 人、20 歳以上 1 人)、第 16 週に 8 人(6～11 歳 1 人、8 歳 2 人、10～14 歳 2 人、15～19 歳 2 人、20 歳以上 1 人)と、このところ報告が目立っています。今後、近隣の状況も含めて、動向に注意する必要があります。

6 **マイコプラズマ肺炎:**3 か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年はかなり多く、年間で 92 人の報告がありました。今年に入ってからは、今までに 14 人の報告がありました。全国での報告は、先月までよりは減少してきていますが、過去 5 年間と比較するとまだ多い状態です。引き続き今後の動向に注意が必要と思われる。

7 **性感染症:**性感染症は、診療科で見ると産婦人科系(産婦)の 11 定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の 15 定点からの報告に基づいて集計されています。

性器クラミジア感染症と性器ヘルペス感染症は、定点あたり報告数が 2 月より増加しており、昨年よりも高い値でした。性器ヘルペス感染症については、再発することが多いため、2006 年 4 月からの新しい届出基準では、「明らかに再発であるもの及び血清抗体のみ陽性のものは除外する」となっています。ただ、再発かどうかは不明なのか、高齢者の報告が多い傾向があります。今回の報告でも、男性で、60 代が 2 人、70 歳以上が 1 人ありました。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。  
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

《今月のトピックス》

- 東京都、埼玉県、千葉県に続き、横浜市でも麻しんが流行中
- インフルエンザは、全国でもほぼ終息に向かう
- 2006 年の全国の HIV/AIDS 報告数は過去最高で、3 年連続で 1000 件を超えた

平成 19 年 4 月 23 日から平成 19 年 5 月 27 日まで(平成 19 年第 17 週から第 21 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 4 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

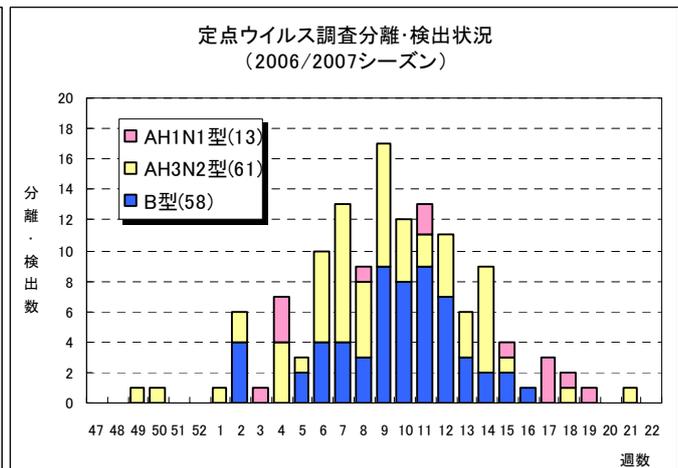
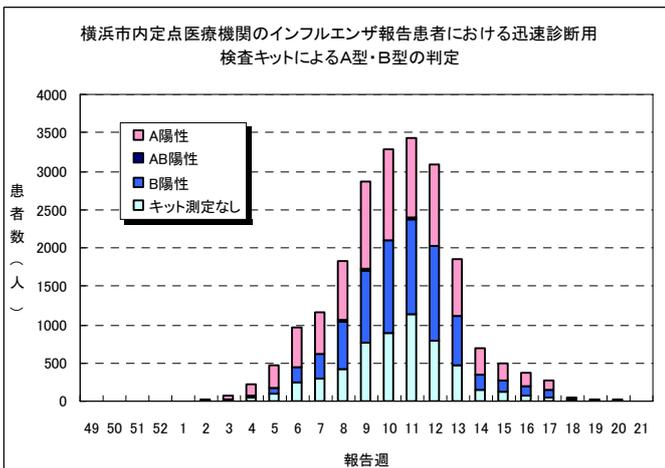
平成 19 年 週—月日対照表

第 17 週	4 月 23～29 日
第 18 週	4 月 30～5 月 6 日
第 19 週	5 月 7～13 日
第 20 週	5 月 14～20 日
第 21 週	5 月 21～27 日

**1 インフルエンザ:** 定点あたり患者報告数は、第 18 週に 0.61 と流行期の目安である 1.0 を下回り、第 21 週は 0.05 と、横浜市における流行は終息しました。全国でも、第 20 週で 1.20 と、ほぼ終息に向かっています。

横浜市内の病原体定点の検体からの、横浜市衛生研究所における第 21 週までのウイルス分離・検出数は、A ゾ連型 13、A 香港型 61、B 型 58 となっています。全国の地方衛生研究所からの報告によれば、5 月 29 日現在、A ゾ連型 367、A 香港型 2079、B 型 1742 です。

今シーズンは、過去 5 シーズンと比べて一番遅い第 4 週から流行期に入り、規模としてはさほど大きくありませんでしたが、ピークが第 11 週と 3 月中旬で、定点あたり 1.0 を下回ったのも第 18 週と 5 月に入っており、過去 20 年と比較しても、一番遅い時期の流行となりました。大きな流行のあった 2004-2005 シーズンも、流行開始は第 3 週と遅かったのですが、ピークは第 7 週でした。また、終息前に、例年に比べて少し高めの状態がしばらく続いたのも、今シーズンの特徴だったようです。全国では、5 月中旬でも学級閉鎖等の報告があがっています。こうしたことから、インフルエンザについては、1 年を通して発生状況を見守る必要があると思われます。



インフルエンザ迅速診断キットの結果をご報告いただいた集計と、横浜市衛生研究所での検査結果を示しました。

**2 咽頭結膜熱:** 第 17 週には定点あたり 0.44 と昨年同様に高めの値でしたが、その後例年とほぼ同じレベルに低下し、第 21 週は 0.32 でした。しかし区別では、定点あたり 2.5 と相変わらず磯子区での発生が目立ち、港北区でも 1.1 と先月同様高い値です。2003 年と 2004 年は、5 月末頃から増加し大きく流行しているため、今後の動向が注目されます。

**3 A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎:** 第 3 週に急に増加し、その後、高いレベルで増減を繰り返しています。第 21 週は定点あたり 2.50 でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 2.38、川崎市は 3.39 でした。区別では、都筑区での

発生が目立ち、第17～21週で全て警報レベルの4をこえており、特に第17週は18.3とかなり高い値でした。また、第21週は、瀬谷7.0、都筑6.3、栄5.0、青葉4.7と、4区で4以上でした。全国でも、過去5年間の同時期と比較してやや多い状態が続いていて、第20週は定点あたり2.55です。引き続き注意が必要と思われます。

平成19年 週一月日対照表

第17週	4月23～29日
第18週	4月30～5月6日
第19週	5月7～13日
第20週	5月14～20日
第21週	5月21～27日

**4 伝染性紅斑:**例年に比べて高めの値が続いていましたが、第16週頃より例年並みの値となり、第21週は定点あたり0.59でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.73、川崎市は0.88と、どちらも横浜市より高めです。全国では、増減はあるものの、過去5年間の同時期と比較してかなり高い値が続いていて、第20週は定点あたり0.78でした。例年、6月頃が一番高いようなので、引き続き動向には注意が必要です。

**5 ヘルパンギーナ:**昨年は、この頃に立ち上がりが見られました。今年は第21週は定点あたり0.07と、まださほどではありませんが、全国では第20週で0.20と少し増加し始めています。例年、6月に入り急に増加してくるため、これから注意が必要です。

**6 麻しん:**現行の感染症発生動向調査では、2001年をピークに減少、2004年に激減、2006年は、全国で520人、横浜市では16人という年間患者報告数でした。しかし、2006年の4～6月には、関東を中心とした麻しんの流行が報告されました。2007年に入って、全国的には過去2年と同様に低い状態が続いていますが、関東での発生は継続していました。

4月に入り、埼玉県や東京都を中心として、麻しんが流行してきました。ゴールデンウィーク後は、さらに流行が拡大し、東京都では、高校や大学での集団発生や、休講等が続きました。横浜市でも、第14週以後報告が続いており、2007年第21週までの累計報告数は、38となり、大学の休講や、中学校の臨時休業等が行われています。成人麻しんも、昨年は報告がありませんでしたが、今年は累計報告数が18となっています。未罹患者、未接種者への予防接種を呼びかけていますが、流行はまだしばらく続くと思われるので、拡大防止へ向けて、引き続き注意が必要です。最新の情報については、横浜市感染症臨時情報《麻しん》をご覧ください。

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html))

感染症発生動向調査においては、麻しんは小児科定点から報告され、届出基準では、15歳以上は除くとなっており、一方、成人麻しん(15歳以上)は基幹定点(病院)から報告されることになっています。ただ、成人麻しんの患者が、基幹定点ではなく内科・小児科を受診する場合もあり、その場合は、小児科定点の報告に記載されてきますので、その分も計上しています。

**7 マイコプラズマ肺炎:**3か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年はかなり多く、年間で92人の報告がありました。今年に入ってから、今までに26人の報告がありました。第17～19週に各2人ずつ、第20週には6人と、このところ、報告が目立っています。全国での報告は、過去5年間と比較すると多い状態が続いており、引き続き今後の動向に注意が必要と思われます。

**8 性感染症:**性感染症は、診療科で見ると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。4月は、特に大きな変化は見られていません。

さて、5月22日に厚生労働省エイズ発生動向委員会から、2006年エイズ発生動向の概要について発表がありました(速報値については2月の本報告でお知らせしています)。2006年に新たに報告されたHIV感染者は952で前年の832より増加し過去最高となり、AIDS患者も406と前年の367より増加し過去最高となりました。

なお、6月1日～7日は、HIV検査普及週間で、これを機会に国や都道府県等は取組を強化しています。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

平成 19 年 6 月期

## 横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成 19 年 6 月 28 日  
横浜市健康福祉局健康安全課  
TEL045(671)4182  
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課  
TEL045(754)9816

### 《今月のトピックス》

- 麻疹については、ピークは過ぎたが、まだ報告が続いている
- A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の動向に引き続き注意
- 咽頭結膜熱、ヘルパンギーナなどの夏季に流行する疾患の報告が、現時点では少ない

平成 19 年 5 月 21 日から平成 19 年 6 月 24 日まで(平成 19 年第 21 週から第 25 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 5 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成 19 年 週—月日対照表

第 21 週	5 月 21～27 日
第 22 週	5 月 28～6 月 3 日
第 23 週	6 月 4～10 日
第 24 週	6 月 11～17 日
第 25 週	6 月 18～24 日

- 1 咽頭結膜熱:**夏季に流行する疾患で、例年 6 月頃から増加が見られます。横浜市では、今年、6 月に入り横ばい状態で、第 25 週は定点あたり 0.47 でした。区別では、磯子区での発生が引き続き目立っており、3.5 で、港北区も 1.2 と先月同様高くなっています。また、都筑区が 1.5 と、3 区で警報開始レベルの 1.0 を超えています。全国では、第 24 週は 0.55 で 23 週の 0.56 からあまり動いていません。今後、同様の状態が続くのか、さらに増加していくのか、今後の動向には注意が必要です。
- 2 A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎:**今年、昨年同様、高いレベルで増減を繰り返しており、ここ 3 週は過去 5 年間と比べても一番高い値でした。第 25 週は定点あたり 2.52 で、神奈川県(横浜、川崎を除く)の 2.03 より高く、川崎市の 3.30 より低い値です。区別では、引き続き都筑区での発生が目立ち、定点あたり 8.0、他には泉区 5.3、瀬谷区 4.3 が高く、3 区で警報開始レベルの 4.0 を超えています。全国でも、昨年同様高い状態が続いていて、第 24 週は定点あたり 2.23 です。引き続き注意が必要です。
- 3 手足口病:**例年、第 28～29 週にピークがありますが、横浜市では、昨年は秋に小さな山がありピークは第 41 週でした。今年も昨年同様、この時期としては低い値で、第 25 週は定点あたり 0.45 です。区別では、瀬谷区が定点あたり 3.3 と、他区に比べて目立ちました。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 0.55、川崎市は 0.73 と、どちらも横浜市より高く、全国でも、第 19 週以降増加が続いていますので、今後の動向には注意が必要と思われます。
- 4 伝染性紅斑:**横浜市では、ここ数週間は横ばいの傾向が続いていて、第 25 週は定点あたり 0.61 でした。区別では、都筑区が第 24 週に 3.0、瀬谷区が第 24 週に 3.3、第 25 週に 2.0 と高い値でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 1.14、川崎市は 1.06 と、どちらも横浜市より高めです。全国では、増減はあるものの、過去 5 年間の同時期と比較してかなり高い値が続いていて、第 24 週は定点あたり 0.97 でした。引き続き動向には注意が必要と思われます。
- 5 ヘルパンギーナ:**夏季に流行する疾患です。横浜市では、今年、例年に比べて立ち上がりが遅かったのですが、第 24 週が 0.27、第 25 週が 0.52 と、増加してきました。区別では、青葉区が 2.7 と目立っています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は 1.09、川崎市は 2.36 と、どちらも横浜市より高い値です。全国では第 19 週以降増加が続いており、第 24 週は 0.84 と、今後急速に増えてくることが予想されます。これから注意が必要です。

平成 19 年 週一月日対照表

第 21 週	5 月 21～27 日
第 22 週	5 月 28～6 月 3 日
第 23 週	6 月 4～10 日
第 24 週	6 月 11～17 日
第 25 週	6 月 18～24 日

**6 麻しん:** 4 月に入り、埼玉県や東京都から始まり、千葉県、神奈川県等、南関東を中心に麻しんが流行してきました。ゴールデンウィーク後は、さらに流行が拡大し、東京都では、高校や大学での集団発生や、休講等が続きました。横浜市でも、第 14 週以降、小児科定点と基幹定点からの報告が続いています。また、定点とは別に、学校等(保育園、幼稚園、小・中・高等学校、大学、専門学校)からも報告されており、休講も行われています。小児科定点からの報告は、第 22 週をピークに、基幹定点からの報告は、第 21 週をピークに、横ばいもしくは減少していますが、発生は続いているので、動向にはまだ注意が必要です。最新の情報については、横浜市感染症臨時情報《麻しん》をご覧ください。

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html))

感染症発生動向調査においては、麻しんは小児科定点から報告され、届出基準では、15 歳以上は除くとなっており、一方、成人麻しん(15 歳以上)は基幹定点(病院)から報告されることになっています。ただ、成人麻しんの患者が、基幹定点ではなく内科・小児科を受診する場合もあり、その場合は、小児科定点の報告に記載されてきますので、その分も計上しています。

**7 マイコプラズマ肺炎:** 3 か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年はかなり多く、年間で 92 人の報告がありました。今回は、第 24 週に 1 人、第 25 週に 1 人報告があり、今年に入ってから総数は、28 人になりました。全国での報告は、過去 5 年間と比較すると多い状態が続いているので、引き続き今後の動向に注意が必要と思われます。

**8 性感染症:** 性感染症は、診療科で見ると産婦人科系(産婦)の 11 定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の 15 定点からの報告に基づいて集計されています。

性器クラミジア感染症では、男性の報告が 3 月より増えており、昨年に比べても高い値になっています。一方、女性では、15～19 歳の報告が 2 人あり、若年女性への感染の拡がり心配されます。

性器ヘルペスウイルス感染症では、やはり高齢者の報告が多い傾向があり、今回も、女性で、60 代が 2 人、70 代が 1 人ありました。届出基準では、「明らかに再発であるもの及び血清抗体のみ陽性のものは除外する」となっています。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

平成 19 年 7 月期

## 横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成 19 年 7 月 26 日  
横浜市健康福祉局健康安全課  
TEL045(671)4182  
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課  
TEL045(754)9816

### 《今月のトピックス》

- O157 等、腸管出血性大腸菌感染症の発生が、増加中です。
- 麻しんの流行は、ほぼ終息しました。
- ヘルパンギーナ、手足口病など、夏季に流行する疾患の動向に注意してください。

平成 19 年 6 月 18 日から平成 19 年 7 月 22 日まで(平成 19 年第 25 週から第 29 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 6 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成 19 年 週—月日対照表

第 25 週	6 月 18～24 日
第 26 週	6 月 25～7 月 1 日
第 27 週	7 月 2～ 8 日
第 28 週	7 月 9～15 日
第 29 週	7 月 16～22 日

### 全数報告疾患

1 **腸管出血性大腸菌感染症**:毎年、夏に報告が多くなります。今年も、6 月から報告が増え、7 月は 26 日現在で 21 例となっています。年齢の内訳は、10 歳未満が 7 例、10 代が 2 例、20 代が 4 例、30 代が 3 例、40 代が 1 例、60 代が 2 例、70 代が 2 例でした。

小児でも、生肉の摂取が原因となっている報告があり、注意が必要です。

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	計
平成 16 年	2	5	10	24	18	81
平成 17 年		4	6	16	24	76
平成 18 年	4		2	11	12	64
平成 19 年		2	9	21		

2 **レジオネラ症**:今年は報告が目立ち、1 月に 1 例、4 月に 4 例、5 月に 2 例、6 月に 6 例、7 月に 2 例と、現時点での合計が 15 例で、平成 17 年の 8 例、18 年の 7 例に比べて、かなり多くなっています。

レジオネラ症については、平成 15 年 4 月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療(マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等)を行わないと、症状が急激に悪化したり、致命的になる場合があります、注意が必要です。

その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。

[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html#zensu](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu)

### 定点報告疾患

1 **咽頭結膜熱**:昨年は、立ち上がり 5 月と早く、長期間にわたり流行しました。今年も、6 月に入り例年並には増加してきたものの、その後横ばい状態で、第 29 週は定点あたり 0.39 と、2 週続けて減少しました。区別では、磯子区での発生が引き続き目立っており、定点あたり 3.0 と、第 20 週以後 24 週を除き、ずっと警報開始レベルの 2.0 を超えています。他には、港南 1.3、港北 1.0 が多めでした。全国では、第 28 週は 0.53 で、横ばいから少し減少しました。まだ、今後の動向には注意が必要です。

2 **A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎**:今年も、昨年同様、高いレベルで増減を繰り返しており、過去 5 年間と比べても一番高い値が続いています。ただ、第 24 週以降は減少が続き、第 29 週は定点あたり 1.27 となりました。区別では、定点あたり 4.0 と引き続き都筑区での発生が目立ちます。全国でも、昨年同様高い状態が続いていますが、第 23 週以降減少が続き、第 28 週は定点あたり 1.58 です。まだ、動向には注意が必要です。

3 **手足口病**:例年、第 28～29 週にピークがありますが、横浜市では、昨年は秋に小さな山がありピークは第 41 週でした。今年も昨年同様、6 月にあまり増加しませんでした。7 月に入り、第 28 週に定点あたり 1.29 になりました。

たが、第29週は1.20と減少しています。区別では、瀬谷が定点あたり4.7、港南が2.8と、他区に比べて目立ちました。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.85、川崎市は1.12と、どちらも横浜市より高く、全国でも、第19週以降増加が続き、第28週は1.87でした。今後の動向には注意が必要です。

平成19年 週—月日対照表

第25週	6月18～24日
第26週	6月25～7月1日
第27週	7月2～8日
第28週	7月9～15日
第29週	7月16～22日

**4 伝染性紅斑:**横浜市では、過去3年間と比べて、低めで横ば

いの傾向が続いていましたが、第27週以後減少し、第29週は定点あたり0.33でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.64、川崎市は0.79と、どちらも横浜市より高めです。全国では、増減はあるものの、過去5年間の同時期と比較してかなり高い値が続いていて、第28週は定点あたり0.79でした。妊婦等を含めて、引き続き動向には注意が必要と思われる。

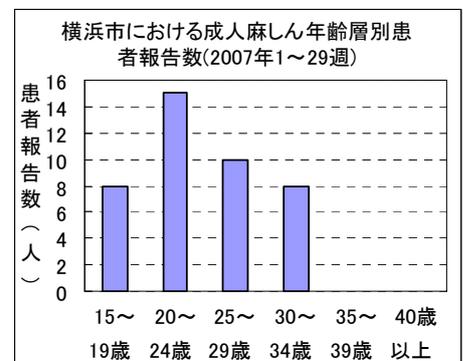
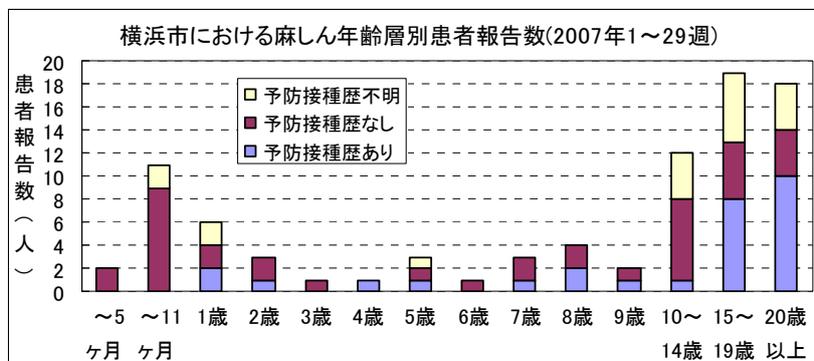
**5 ヘルパンギーナ:**夏季に流行する疾患です。横浜市では、今年例年に比べて立ち上がりが遅かったのですが、6月後半から増加してきて、第29週は定点あたり4.85になりました。区別では、青葉11.2、泉10.7、瀬谷10.7、金沢10.4、緑8.3、港北6.4と、6区で警報開始レベルの4を超えています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は5.72、川崎市は9.36と、どちらも横浜市よりかなり高い値です。全国では第19週以降増加が続いており、第28週は4.35です。流行期を迎えていますので、引き続き注意が必要です。

**6 麻しん:**4月から始まった、千葉県、神奈川県等、南関東を中心にした麻しんの流行は、収まってきているようです。横浜市では、第14週から続いていた、小児科定点からの患者報告は、第22週の14人をピークに減少し、第29週は1人でした。また、定点とは別に、学校等(保育園、幼稚園、小・中・高等学校、大学、専門学校)からも報告をお願いしていましたが、第27週以降、報告はありません。基幹定点からの成人麻しんの報告は、第21週の7人をピークに、減少し、第28、29週は1人でした。

詳しい情報については、横浜市感染症臨時情報《麻しん》をご覧ください。

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html))

全国では、第28週に、麻しん73人、成人麻しん12人の報告がありました。報告がなくなっているわけではないので、まだ動向への注意は必要と思われる。



小児科定点からの麻しん患者報告については、麻しん予防接種歴もご記入いただいております。年齢による内訳を見ると、1歳未満と、学齢期で、接種歴なしが多くなっています。1歳未満の増加については、母体免疫の低下が示唆されます。1～2歳の接種歴ありについては、ワクチンの効果発現前に感染したか、1回で免疫がつかなかった(primary vaccine failure:PVF)と思われる。また、15歳以上では、接種歴ありの割合が高く、ブースターがかからなかったため(secondary vaccine failure:SVF)と考えられます。

**7 性感染症:**性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

性器クラミジア感染症で15～19歳の女性の報告が2人、尖圭コンジローマでも15～19歳の女性の報告が2人あり、若年女性への性感染症の拡がり心配されます。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。  
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

平成 19 年 8 月期

## 横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成 19 年 8 月 30 日  
横浜市健康福祉局健康安全課  
TEL045(671)4182  
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課  
TEL045(754)9816

### 《今月のトピックス》

- O157 等、腸管出血性大腸菌感染症の発生が、引き続き多く報告されています。
- 百日咳で、20 歳以上の報告が目立ちます。
- 後天性免疫不全症候群(エイズ)の報告が続いています。

平成 19 年 7 月 23 日から平成 19 年 8 月 26 日まで(平成 19 年第 30 週から第 34 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 7 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

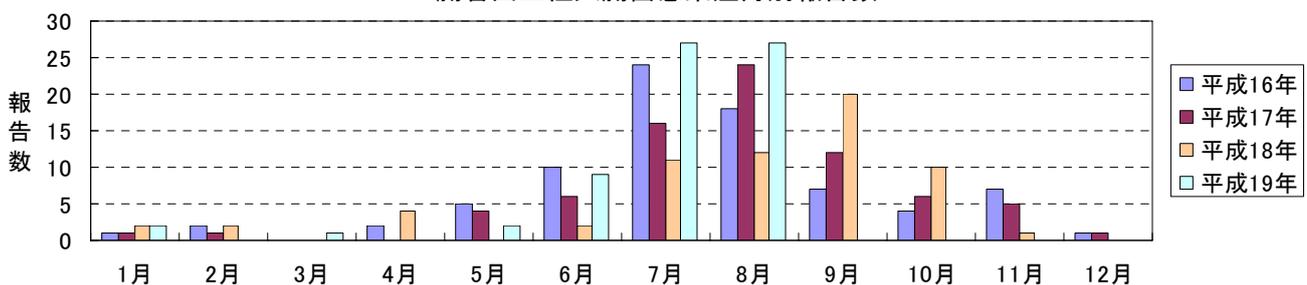
平成 19 年 週—月日対照表

週	日
第 30 週	7 月 22～29 日
第 31 週	7 月 30～8 月 5 日
第 32 週	8 月 6～12 日
第 33 週	8 月 13～19 日
第 34 週	8 月 20～26 日

### 全数報告疾患

- 腸管出血性大腸菌感染症:**毎年、夏に報告が多くなります。今年も、6 月から報告が増え、7 月は 27 例、8 月は 30 日現在で 27 例となっています。年齢の内訳は、10 歳未満が 9 例、10 代が 4 例、20 代が 3 例、30 代が 2 例、40 代が 5 例、50 代が 1 例、60 代が 2 例、70 代が 1 例でした。全国でも多く報告されており、注意が必要です。

腸管出血性大腸菌感染症月別報告数



予防対策の詳細については、以下をご覧ください。

「腸管出血性大腸菌感染症 O157 に注意しましょう」(横浜市衛生研究所作成チラシ)

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/o1572007.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/o1572007.pdf))

腸管出血性大腸菌Q&A(厚生労働省 2007 年 8 月改訂)

(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou19/index.html>)

- レジオネラ症:**8 月も 2 例と 4 月から毎月報告があり、今年は今時点での合計が 18 例で、平成 17 年の 8 例、18 年の 7 例に比べて、かなり多くなっています。レジオネラ症については、平成 15 年 4 月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療(マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等)を行わないと、症状が急激に悪化したり、致死的になる場合があります、注意が必要です。

- 後天性免疫不全症候群:**ほぼ毎月報告があり、8 月は 4 例のうち 2 例がエイズ発症者でした。早期発見は、早期治療と拡大防止に結びつくので、無料匿名検査の PR や、予防に関する普及啓発に努めることが重要です。

横浜市でのエイズ相談・検査事業 <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/14577.html>

※ その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html#zensu](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu))

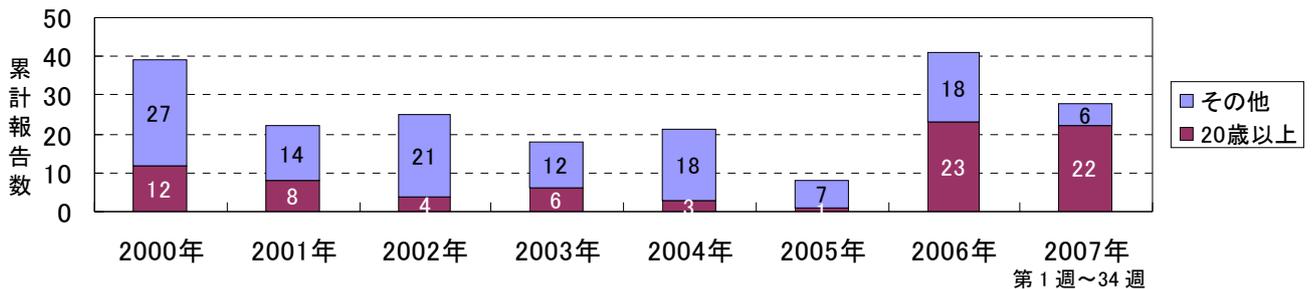
## 定点報告疾患

- 1 **百日咳**: 全国では、2000年にやや大きな流行があり、今年はそれに次ぐ流行になりそうな様子で患者の3割が20歳以上と、成人の割合が増加した事も大きな特徴です。横浜市では、2000年は年間報告数が39人で、昨年はそれより多く41人の報告がありました。グラフに示したように、以前より成人の報告が見られていますが、昨年にその割合が大きく増加し、今年は、現時点でほぼ同数、割合ではさらに大きくなっています。成人は、症状が典型的ではないために診断が見逃されやすく、感染源となって周囲へ感染を拡大してしまうこともあります。百日咳は、母体からの移行抗体が有効に働かないために、乳児早期から罹患する可能性があり、ことに生後6か月以下では死に至る危険性もあるため、注意が必要です。

百日咳の年齢層別患者報告数(2007年第1週～第34週)

年齢層	～5ヶ月	～11ヶ月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～14歳	15～19歳	20歳以上
報告数	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2	1	22

百日咳の累計報告数の年別推移(2000年～2007年第34週)



- 2 **咽頭結膜熱**: 昨年は、ピークが定点あたり1.76で長期間にわたる大きな流行がありましたが、今年は、第27週の0.65がピークではっきりした山も見られず、第34週は0.23でした。今後は、横ばいが続くと思われます。
- 3 **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎**: 今年も、過去5年間と比べても一番高い値が続いていましたが、第24週以降は減少傾向が続いており、第34週は定点あたり0.30と、ほぼ例年並みでした。ただ、例年8月が一番少なく、秋から冬にかけて少し増えていくので、9月末に向けては、また、動向に注意が必要です。
- 4 **手足口病**: 例年、第28～29週にピークがありますが、横浜市では、昨年は秋に小さな山がありピークは第41週でした。今年は、7月中旬から8月中旬にかけて、昨年の秋程度の小さな山が見られ、ピークは第31週の定点あたり1.33でした。その後は減少し、第34週は0.46と、全国と比べても低い値になっています。全国では、第33週で0.85と3週連続で減少していますが、秋にやや高めで横ばいが続く傾向があるので、今後も、動向には注意が必要です。
- 5 **ヘルパンギーナ**: 夏季に流行する疾患で、例年7月中旬頃にピークとなりますが、昨年は立ち上がりが5月末と早く、ピークも第26週でした。今年は、逆に立ち上がりが遅く、7月に入って増加し、第30週の定点あたり6.0をピークに、その後減少しています。第34週は1.54と、終息に向かっています。
- 6 **麻疹**: 第14週(4月初旬)から続いていた小児科定点からの患者報告は、第22週の14人をピークに減少し、第30週に0人になりました。その後散発が見られ、第31週には10～14歳が2人、20歳以上が1人の計3人、第32週には6～11か月が1人、6歳が1人の計2人の報告がありました。
- 7 **性感染症**: 性感染症は、診療科で見ると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。  
性器クラミジア感染症で15～19歳の女性1人と男性2人の報告があり、また、性器ヘルペス感染症でも15～19歳の男性1人の報告があり、先月同様、若年女性だけでなく、若年男性への性感染症の拡がりも心配されます。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。  
横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

平成 19 年 9 月期

## 横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成 19 年 9 月 27 日  
横浜市健康福祉局健康安全課  
TEL045(671)4182  
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課  
TEL045(754)9816

### 《今月のトピックス》

- 海外旅行によるデング熱の患者が 5 例報告されました。
- 百日咳で、20 歳以上の報告が目立ちます。
- O157 等、腸管出血性大腸菌感染症の発生は減少しています。

平成 19 年 8 月 20 日から平成 19 年 9 月 23 日まで(平成 19 年第 34 週から第 38 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 8 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

### 平成 19 年 週一月日対照表

第 34 週	8 月 20～26 日
第 35 週	8 月 27～9 月 2 日
第 36 週	9 月 3～ 9 日
第 37 週	9 月 10～16 日
第 38 週	9 月 17～23 日

### 全数報告疾患

1 **腸管出血性大腸菌感染症**:毎年、夏に報告が多くなります。今年も、6 月から報告が増え、7 月は 27 例、8 月は 28 例でしたが、9 月は 27 日現在で 3 例に減少しています。しかし、全国では多く報告されており、注意が必要です。市内の発生例では、小児がレバ刺し、ユッケ等の生肉を摂取した例がありました。

予防対策の詳細については、以下をご覧ください。

「腸管出血性大腸菌感染症 O157 に注意しましょう」(横浜市衛生研究所作成チラシ)

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/o1572007.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/o1572007.pdf))

腸管出血性大腸菌 Q&A(厚生労働省 2007 年 8 月改訂)

(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou19/index.html>)

2 **デング熱**:第 38 週に 5 例の報告がありました。いずれも海外旅行での感染で、特に、アジアからの帰国者が目立っています。予防接種も予防薬もないため、蚊に刺されないようにすることが、唯一の予防法です。

詳しい情報は、横浜市感染症臨時情報「東南アジアで、デング熱に感染する人が増えています！」

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/dengue.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/dengue.pdf))

をご覧ください。

3 **レジオネラ症**:8 月も 3 例と、4 月以降毎月報告があり、今年は今時点での合計が 21 例で、昨年までと比べて非常に増加しました。全国でも、第 37 週までの累計は 440 例と、かなり多くなっています。(表参照)

レジオネラ症については、平成 15 年 4 月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療(マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等)を行わないと、症状が急激に悪化したり、致死的になる場合があります。高齢者や、糖尿病などの基礎疾患がある人は注意が必要です。また、肺炎患者においては、循環式浴槽やジャグジーなどの入浴施設の利用を確認する事も必要と思われる。

### レジオネラ症の報告数の年別推移(2000年～2007年第37週)

	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
全国	154	86	167	146	161	281	514	440
神奈川県	2	2	4	6	6	19	26	31
横浜市(再掲)	-	-	3	2	1	8	7	19

※ その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html#zensu](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu))

## 定点報告疾患

1 **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎**:今年は、過去5年間と比べても一番高い値が続いていましたが、第34週には、例年並みの定点あたり0.30まで低下しました。その後少し増加し、第38週は、定点あたり0.49でした。全国では、第34週から増加が続き、過去5年間の同時期と比較してかなり多く、第37週は定点あたり0.84でした。例年、冬季にもピークが見られるので、今後の動向に注意が必要です。

平成19年 週一月日対照表

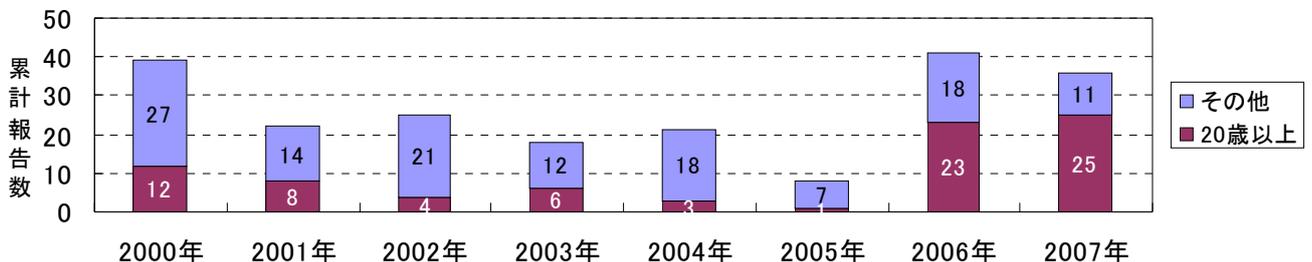
第34週	8月20～26日
第35週	8月27～9月2日
第36週	9月3～9日
第37週	9月10～16日
第38週	9月17～23日

2 **感染性胃腸炎**:毎年秋から冬にかけて流行します。今年も、6月以降、過去5年間と比べて高い値が続いています。全国では、第34週から増加が続き、過去5年間と比べて高くなっています。昨年は、非常に大きな流行がありましたし、冬にかけて増えていくので、立ち上がりの時期も含めて、動向に注意が必要です。

3 **手足口病**:例年、第28～29週にピークがありますが、横浜市では、昨年は秋に小さな山がありピークは第41週でした。今年も、7月中旬から8月中旬にかけて、昨年の秋程度の小さな山が見られ、ピークは第31週の定点あたり1.33でした。その後は減少していましたが、第37週から増加し、第38週は定点あたり0.70でした。全国でも、第35、36週は増加して高めになっており、今後も、動向には注意が必要です。

4 **百日咳**:今年も、第38週までで36人の報告があり、20歳以上が多くなっています。第34週～38週での報告を見ると、12人のうち6人が20歳以上、あとは1歳が1人、11ヶ月以下が5人でした。成人は、症状が典型的ではないために診断が見逃されやすく、感染源となって周囲へ感染を拡大してしまうこともあります。百日咳は、母体からの移行抗体が有効に働かないために、乳児早期から罹患する可能性があり、ことに生後6か月以下では重症化する危険性があるため、早めに予防接種を受けることをお勧めします。(三種混合ワクチンとして、生後3か月から接種できます。)

百日咳の累計報告数の年別推移(2000年～2007年第38週)



5 **麻しん**:横浜市では、第22週の14人をピークに、麻しんの流行はほぼ終息しました。その後散発が見られましたが、第35週に15～19歳が1人報告された後は、0人が3週続いています。全国では、福岡、大阪など、9月に入っても報告数が多いところがあり、大阪では、9月中旬に臨時休校した高校があります。麻しんの流行は、春季から初夏にかけてが一般的ですが、秋季においても警戒を継続していく必要があります。

麻しんの予防接種については、単独ワクチンの1回接種から、2006年度より、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種に変わっています。横浜市の接種率は、第I期が100%、第II期が約80%です。麻しんの排除に向けては、I期・II期ともに高い接種率を維持していく必要があります。

6 **性感染症**:性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

8月の男女合計の定点あたり報告数は、性器クラミジア感染症と尖圭コンジローマで7月より増加し、性器ヘルペスウイルス感染症と淋菌感染症で7月より減少しました。また、昨年の8月と比べて増加していたのは、尖圭コンジローマだけでした。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

## 《今月のトピックス》

- インフルエンザ、過去 6 年間に比べて最も早く増加の兆し、A ソ連型を検出。
- ノロウイルスを含む感染性胃腸炎、例年より少し多く、集団発生もあり、流行期に向けて注意。
- 百日咳では、依然として 20 歳以上の報告が半数を占める。

平成 19 年 9 月 17 日から平成 19 年 10 月 21 日まで(平成 19 年第 38 週から第 42 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 9 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

## 平成 19 年 週一月日対照表

第 38 週	9 月 17～23 日
第 39 週	9 月 24～30 日
第 40 週	10 月 1～7 日
第 41 週	10 月 8～14 日
第 42 週	10 月 15～21 日

## 全数報告疾患

- 1 **レジオネラ症**:10 月は 1 例の報告でしたが、4 月以降毎月報告があり、今年現時点での合計が 23 例と、すでに昨年の 3 倍以上になっています。全国でも、第 42 週までの累計は 516 例と、昨年の報告数をこえています。(表参照)

レジオネラ症については、平成 15 年 4 月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療(マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等)を行わないと、症状が急激に悪化したり、致死的になる場合があります。高齢者や、糖尿病などの基礎疾患がある人は注意が必要です。また、肺炎患者においては、循環式浴槽やジャグジーなどの入浴施設の利用を確認する事も必要と思われれます。

## レジオネラ症の報告数の年別推移(2000年～2007年第42週)

	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
全国	154	86	167	146	161	281	514	516
神奈川県	2	2	4	6	6	19	26	36
横浜市(再掲)	-	-	3	2	1	8	7	23

- 2 **破傷風**:三種混合を未接種の小児の報告がありました。横浜市での破傷風の報告は、2005 年までは 1 例、2006 年が 2 例です。2007 年は、5 月に 1 例、45 歳の男性の報告がありました。全国での、2007 年 42 週までの累計は、77 人で、そのうち 60 人が 60 歳以上で、19 歳以下の報告は、横浜市のケース以外にはありません。

※ その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html#zensu](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu))

## 定点報告疾患

- 1 **インフルエンザ**:今年、例年よりかなり早く集団かぜによる学級閉鎖等が報告されています。神奈川県では、昨シーズンより 3 か月早く、相模原市で今シーズン初めての報告がありました。

([http://www.eiken.pref.kanagawa.jp/003\\_center/0304\\_influenza/files/071016\\_kisyahappyou.pdf](http://www.eiken.pref.kanagawa.jp/003_center/0304_influenza/files/071016_kisyahappyou.pdf))

横浜市では、第 28 週以後定点からの報告はありませんでしたが、40 週、41 週に 1 人ずつ、第 42 週には、21 人の報告がありました。過去 6 年間と比べて、最も早く増加の兆しが見られています。

また、横浜市内の病原体定点の検体からは、昨シーズンは流行が見られなかった A ソ連型が検出されており、今後の動向に、よく注意していく必要があります。

2 RSウイルス感染症:例年、インフルエンザに先がけて流行が見られます。昨シーズンは、過去3年間に比べてかなり多く報告されました。今年も、第37週以後報告が続き、第41週に5人、42週に3人と、少し目立ってきました。全国での報告数も、昨年より多い数で、増加傾向にあり、動向に注意が必要です。

平成19年 週一月日対照表

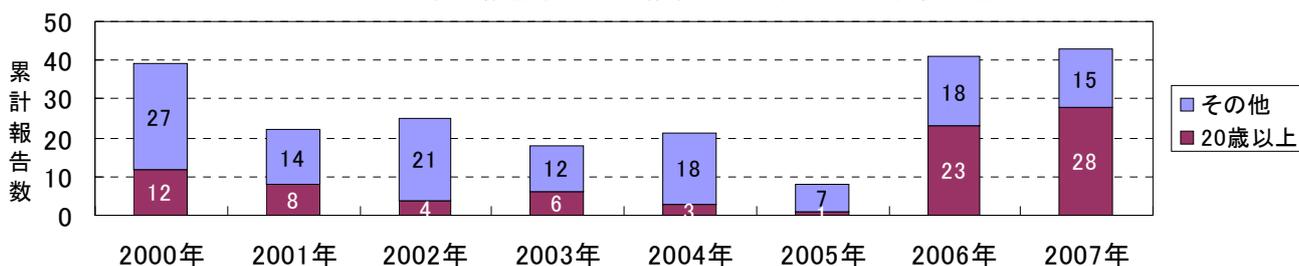
第38週	9月17～23日
第39週	9月24～30日
第40週	10月1～7日
第41週	10月8～14日
第42週	10月15～21日

3 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎:例年、春季を中心とした流行の後に夏季には大きく低下し、また冬季の流行に向かって増加します。今年も、第34週に最低値となった後、増加傾向が続いており、第42週は定点あたり0.66でした。川崎市が1.0、神奈川県(横浜、川崎を除く)が0.95と、どちらも横浜より高くなっており、今後の動向に注意が必要と思われます。

4 感染性胃腸炎:昨年は、10月末頃から増加し、12月に1999年以降最大の流行がありました。全国では、過去5年間の同時期と比べるとやや多く、第41週で定点あたり3.07でした。横浜市も過去5年間と比べて多く、第42週は3.18、また川崎市は5.41とかなり高く、これから冬の流行期に向けて、注意が必要です。

5 百日咳:今年も、第42週までで43人の報告があり、20歳以上が多くなっています。第38週～42週での報告を見ると、9人のうち4人が20歳以上、あとは3歳が1人、1歳が2人、11ヶ月以下が2人でした。成人は、症状が典型的ではないために診断が見逃されやすく、感染源となって周囲へ感染を拡大してしまうこともあります。百日咳は、母体からの移行抗体が有効に働かないために、乳児早期から罹患する可能性があり、ことに生後6か月以下では重症化する危険性があるため、早めに予防接種を受けることをお勧めします。(三種混合ワクチンとして、生後3か月から接種できます。)

百日咳の累計報告数の年別推移(2000年～2007年第42週)



6 麻しん:全国の小児科定点からの麻しんの患者報告数は、第39週が47人、40週が36人、41週が20人と、減少してきています。横浜市では、39週に3人、40週に2人、41週に3人の計8人の報告があり、うち、9か月の1人を除きすべて10代で、8人とも予防接種歴がありませんでした。

麻しんについては、油断することなく、次の流行時に適切な対応がとれるように準備しておく事が大切です。

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf))

麻しんの予防接種については、単独ワクチンの1回接種から、2006年度より、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種に変わっています。また、麻しんの排除に向けて、来年4月より5年間、中1及び高3相当の年齢への定期接種が実施される(厚生労働省でパブリックコメント募集中:下記参照)予定です。

(<http://search.e-gov.go.jp/servlet/Public?CLASSNAME=Pcm1010&BID=495070152&OBJCD=100495&GROUP>)

7 性感染症:性感染症は、診療科で見ると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

9月は、尖圭コンジローマ以外の3つの感染症で、8月より増加しています。特に、性器クラミジア感染症の男性では、昨年よりも多く、15～19歳が2人報告されていました。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

平成 19 年 11 月 期

# 横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成 19 年 11 月 29 日  
 横浜市健康福祉局健康安全課  
 TEL045(671)4182  
 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課  
 TEL045(754)9816

## 《今月のトピックス》

- インフルエンザ、過去 10 年間に比べて最も早く流行期に。A ソ連型を検出。
- ノロウイルスを含む感染性胃腸炎、増加傾向。集団発生もあり注意。
- 麻疹、学校閉鎖の報告あり。来年 1 月から麻疹・風しんは全数報告にして詳細を把握。

平成 19 年 10 月 22 日から平成 19 年 11 月 25 日まで(平成 19 年第 43 週から第 47 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 10 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成 19 年 週一月日対照表

第 43 週	10 月 22～28 日
第 44 週	10 月 29～11 月 4 日
第 45 週	11 月 5～11 日
第 46 週	11 月 12～18 日
第 47 週	11 月 19～25 日

## 全数報告疾患

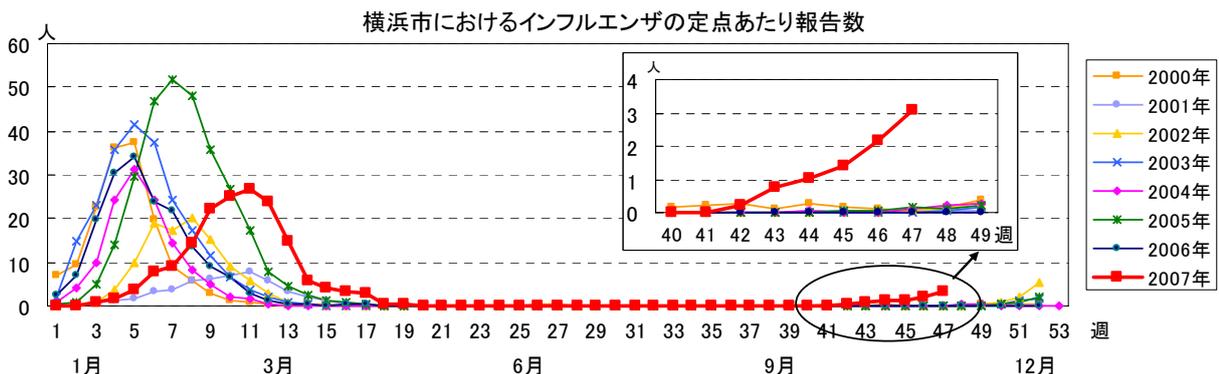
- 腸管出血性大腸菌感染症:** 秋になって減少しましたが、11 月は 29 日現在で 5 例と発生は続いており、引き続き注意が必要です。
- 細菌性赤痢:** 国内発生例が 2 件あり、感染源・感染経路について調査しましたが、特定できませんでした。
- レジオネラ症:** 11 月は 2 例と、4 月以降毎月報告が続いており、現時点での合計が 26 例と、すでに昨年の 3.7 倍になっています。全国でも、第 47 週までの累計は 584 例と、昨年の報告数を大きく超えています。

レジオネラ症については、平成 15 年 4 月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療(マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等)を行わないと、症状が急激に悪化したり、致死的になる場合があります。高齢者や、糖尿病などの基礎疾患がある人は注意が必要です。また、肺炎患者においては、循環式浴槽やジャグジーなどの入浴施設の利用を確認する事も必要と思われれます。

※ その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。  
[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html#zensu](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu)

## 定点報告疾患

- インフルエンザ:** 横浜市では、第 44 週に定点あたり 1.04 と、過去 10 年間に比べて最も早く流行期に入りました。その後も増加が続き、第 47 週は定点あたり 3.10 で、18 区のうち 14 区で流行期に入っています。区別では、瀬谷 12.3、青葉 8.2、神奈川 4.9、港北 4.7 が目立ちます。



また、横浜市内の病原体定点の検体からは、昨シーズンは流行が見られなかったAソ連型が検出されており、今後の動向に、注意する必要があります。

最新の情報については、([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/sokuhou.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/sokuhou.pdf))をご覧ください。

**2 感染性胃腸炎:** 昨年は、10月末頃から増加し、12月に1999年以降最大の流行がありました。昨年のような急激な増加ではありませんが、増加傾向が続いており、第47週は定点あたり7.05でした。全国でも第42週以降増加が続いていますし、川崎市が11.71、神奈川県(横浜、川崎を除く)が8.24と、どちらも横浜より高くなっています。冬の流行期に入ることあり、今後の動向には注意が必要です。

平成 19 年 週一月日対照表

第 43 週	10 月 22～28 日
第 44 週	10 月 29～11 月 4 日
第 45 週	11 月 5～11 日
第 46 週	11 月 12～18 日
第 47 週	11 月 19～25 日

**3 RS ウイルス感染症:** 例年、インフルエンザに先がけて流行が見られます。昨シーズンは、過去3年間に比べてかなり多く報告されました。今年も、第44週に4人、45週に9人、46週に7人、47週に5人と、報告が続いています。引き続き、動向に注意が必要です。

**4 A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎:** 例年、春季を中心とした流行の後に夏季には大きく低下し、また冬季の流行に向かって増加します。今年も、第34週に最低値となった後、45週の1.31まで増加傾向が続き、第47週は定点あたり1.13と、昨年に引き続き多く報告されています。川崎市が2.23、神奈川県(横浜、川崎を除く)が1.43と、どちらも横浜より高くなっており、今後の動向に注意が必要です。

**5 百日咳:** 今年も、第47週までで47人の報告があり、全国的にやや大きな流行のあった2000年の39人、昨年の41人を上回っています。第43週～47週の報告は4人と前回より減少し、年齢は20歳以上が2人、1歳未満が2人でした。成人は、症状が典型的ではないために診断が見逃されやすく、感染源となって周囲へ感染を拡大してしまうこともあります。百日咳は、母体からの移行抗体が有効に働かないために、乳児早期から罹患する可能性があり、特に、生後6か月以下では重症化する危険性があります。早期の予防接種が必要です。(三種混合ワクチンとして、生後3か月から接種できます。)

**6 麻疹:** 全国の小児科定点からの麻疹の患者報告数は、第43週は14人まで減少しましたが、その後は44週18人、45週に43人、46週に41人と、報告が続いています。横浜市では、44週に2人、45週に3人の報告があり、すべて10代で、予防接種歴については1人が未接種で、残りは不明でした。また、横浜市内の高校で、11月8～11日に学校閉鎖がありました。

麻疹に対しては、油断することなく、次の流行時に適切な対応がとれるように準備しておく事が大切です。

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf))

#### 《麻疹の排除に向けて》

- ① 2006年度より、麻疹単独ワクチンの1回接種から、麻疹風しん混合ワクチンによる2回接種に変更。
- ② 2008年4月より5年間、中1及び高3相当の年齢への定期接種を実施。
- ③ 2008年1月から、風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握。

(厚生労働省でパブリックコメント募集中: 下記参照)

(<http://search.e-gov.go.jp/servlet/Public?CLASSNAME=Pcm1010&BID=495070181&OBJCD=100495&GROUP=>)

**7 性感染症:** 性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

10月は、定点あたり報告数が全て9月より増加しています。性器クラミジア感染症においては、女性は、報告された27人のうち7人が15～19歳でした。

12月1日は、世界エイズデーです。今年度のテーマは、「Living Together～大切な人を守るために～」で、各地で様々なイベントが実施されます。( <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/10/h1029-5.html> )

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL: <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

《今月のトピックス》

- インフルエンザ、Aソ連型が全区で流行中。咳エチケットを心がけましょう！  
 (厚生労働省ポスター<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou01/pdf/01c.pdf>)
- ノロウイルスを含む感染性胃腸炎、集団発生もあり、引き続き注意を。
- 麻しん、散発が続く。小学校入学前のⅡ期の予防接種を確実に！  
 1月から麻しん・風しんは全数報告、麻しんは 24 時間以内を目途に届出を。

平成 19 年 11 月 19 日から平成 19 年 12 月 23 日まで(平成 19 年第 47 週から第 51 週まで。ただし、性感染症については平成 19 年 11 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

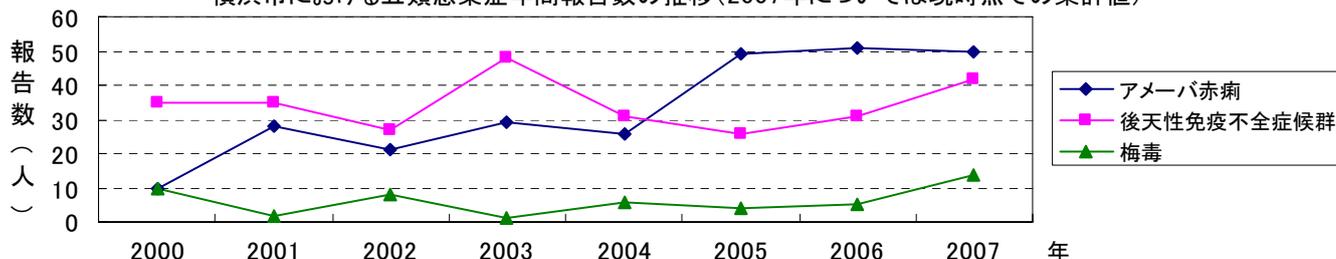
平成 19 年 週一月日対照表

第 47 週	11 月 19～25 日
第 48 週	11 月 26～12 月 2 日
第 49 週	12 月 3～ 9 日
第 50 週	12 月 10～16 日
第 51 週	12 月 17～23 日

全数報告疾患

- 1 腸チフス:今年初めての報告がありました。推定感染経路は経口感染で、海外からの帰国者でした。
- 2 レジオネラ症:12 月は 2 例と、4 月以降毎月報告が続き、現時点での合計が 28 例と、すでに昨年の 4 倍になっています。全国でも、第 51 週までの累計は 647 例と、昨年の報告数を大きく超えています。  
 レジオネラ肺炎患者においては、循環式浴槽やジャグジーなどの入浴施設の利用を確認する事が必要です。なお、衛生研究所では、原因究明のための喀痰検査や遺伝子検査を行っています。
- 3 後天性免疫不全症候群:ほぼ毎月報告があり、12 月は 4 例、全て男性で、同性間性的接触によるものが 3 例でした。性感染症と考えられているア메ーバ赤痢、梅毒と合わせて、経年変化をグラフに示しました。

横浜市における五類感染症年間報告数の推移(2007年については現時点での集計値)

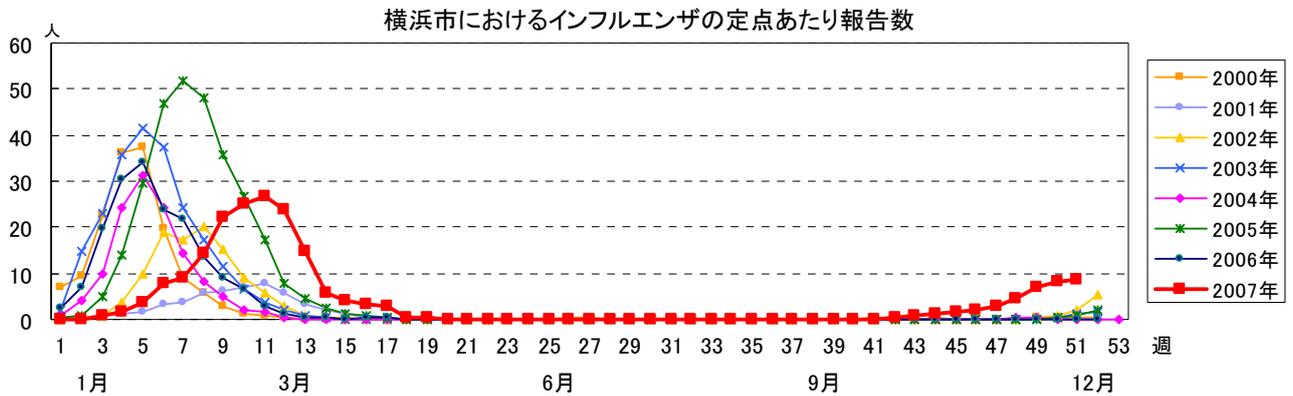


※ その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。  
[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html#zensu](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu)

定点報告疾患

- 1 インフルエンザ:横浜市では、過去 10 年間に比べて最も早い第 44 週に、近隣の都県に先がけて流行期に入りました。その後も増加が続き、第 51 週は定点あたり 8.59 で、すべての区で流行期に入っています。区別では、都筑 15.0、磯子 14.0、栄 13.8、港北 12.1、神奈川 11.0、南 11.0 の 6 区で注意報レベルの「10」を超えています。また、川崎市は 12.92、神奈川県(横浜、川崎を除く)は 9.96 と、横浜市より高めです。

横浜市内の病原体定点の検体からは、ここ数年間は大きな流行が見られなかった A ソ連型が検出されています。これらは、今シーズンから使用されているワクチンと類似株とされていますが、最近の横浜市の検査結果では、抗原変異したウイルス株が増加しつつあるので、今後注意が必要です。最新の情報については、[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/sokuhou.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/sokuhou.pdf) をご覧ください。



**2 感染性胃腸炎:** 昨年の流行レベルには及ばないものの、11 月後半から増加傾向が続いています。例年第 50～51 週にピークがありますが、今年も第 50 週が定点あたり 17.79、51 週は 17.78 と、横ばいになってきました。ただ、川崎市が 23.19、神奈川県(横浜、川崎を除く)が 24.82 と、どちらも横浜より高く警報レベルを超えているので、注意が必要です。

平成 19 年 週一月日対照表

第 47 週	11 月 19～25 日
第 48 週	11 月 26～12 月 2 日
第 49 週	12 月 3～9 日
第 50 週	12 月 10～16 日
第 51 週	12 月 17～23 日

病院、施設等における集団発生もあり、職員の健康管理についても、十分注意を払う必要があります。

**3 RS ウイルス感染症:** 例年、インフルエンザに先がけて流行が見られます。昨シーズンは、過去 3 年間に比べてかなり多く報告されました。今年も、第 47 週に 5 人、48 週に 13 人、49 週に 17 人と徐々に増え、50 週は急激に増えて 33 人の報告がありました。第 51 週は 18 人でした。引き続き、動向に注意が必要です。

**4 A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎:** 例年、春季を中心とした流行の後に夏季には大きく低下し、また冬季の流行に向かって増加します。今年も、第 34 週に最低値となった後、細かな増減はあるものの増加傾向が続き、第 51 週は定点あたり 1.42 と、昨年、一昨年並に多く報告されています。川崎市が 3.06、神奈川県(横浜、川崎を除く)が 2.33 と、どちらも横浜より高くなっており、今後の動向に注意が必要です。

**5 水痘:** 例年、年末にかけて発生が増加します。今年も増加傾向が続いており、動向に注意が必要です。

**6 麻疹:** 全国の小児科定点からの麻疹の患者報告数は、第 43 週は 14 人まで減少しましたが、その後また増加し、47 週 33 人、48 週 43 人、49 週 19 人、50 週 33 人と、報告が続いています。横浜市では、第 48 週に 1 人、49 週に 1 人、50 週に 2 人、51 週に 3 人と、報告が続いています。予防接種歴については接種歴ありが 1 人、接種歴なしが 3 人で、残りは不明でした。予防接種のさらなる徹底が必要です。4 月からの小学校入学に備え、1 月～3 月の間に、Ⅱ期接種を確認する事が重要です。

麻疹に対しては、油断することなく、次の流行時に適切な対応がとれるように準備しておく事が大切です。

「麻疹(はしか)油断は禁物！」

[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf)

《麻疹の排除に向けて》

- ① 2006 年度より、麻疹単独ワクチンの 1 回接種から、麻疹風しん混合ワクチンによる 2 回接種に変更。
- ② 2008 年 4 月より 5 年間、中 1 及び高 3 相当の年齢への定期接種を実施。
- ③ 2008 年 1 月から、風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握。

**7 性感染症:** 性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の 11 定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の 15 定点からの報告に基づいて集計されています。11 月は特に大きな変化は見られていません。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

横浜市衛生研究所ホームページアドレス URL:<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

# 感染症に気をつけよう



## 1. 全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

6月は腸管出血性大腸菌感染症（O157等）が9件、  
レジオネラ症が5件報告されています。

## 2. 定点報告感染症（感染症法における5類感染症）5月21日～6月24日

疾患名	市内流行状況		コメント
<u>咽頭結膜熱（プール熱）</u>	△	➡	市全体では、例年に比べ、あまり報告は多くありませんが、磯子区からの報告が多くなっています。
<u>A群溶血性レンサ球菌咽頭炎</u>	◎	➡	高いレベルでの状態が続いており、注意が必要です。都筑区、泉区、瀬谷区からの報告が多くなっています。
<u>手足口病</u>	△	➡	市全体では、例年に比べ、あまり報告は多くありませんが、瀬谷区からの報告が多くなっています。
<u>伝染性紅斑</u>	△	➡	横浜市では、横ばいの傾向が続いていますが、全国では例年に比べ、報告が多くなっています。
<u>ヘルパンギーナ</u>	△	➡	例年に比べて立ち上がりが遅かったのですが、増加してきました。青葉区からの報告が多くなっています。
<u>麻疹（はしか）</u>	○	➡	流行のピークは過ぎましたが、まだ報告が続いています。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし

➡：増加傾向、➡：横ばい

## 3. これから流行が予想される病気とその予防法

### (1) どんな病気が多くなるの？

・腸管出血性大腸菌感染症（O157等）に注意が必要です。（横浜市では、7月～9月に特に多く報告されています。）

・咽頭結膜熱、手足口病、ヘルパンギーナなどが例年夏に流行します。

・麻疹（はしか）流行のピークは過ぎましたが、まだ報告が続いています。引き続き注意しましょう。最新の情報については、横浜市感染症臨時情報《麻疹》をご覧ください。

[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf)

### (2) どのようにすれば予防できるの？

・食品を調理する際は、中まで火が通るように十分な加熱をしましょう。また、生焼けの肉やレバ刺しなどは食べないようにしましょう。

・手洗い・うがいを心がけましょう。

特に、トイレの後は、石けんでよく手を洗いましょう。

・タオルの共用はやめましょう。



詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」

[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic\\_inf/kansen\\_khama.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic_inf/kansen_khama.html)

をご覧ください。

子供の感染症については、こども青少年局ホームページ「こどもの病気とホームケアこどもに多い感染症編」

[http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo\\_kenkou/homecare.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo_kenkou/homecare.html)

をご覧ください。

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

# 感染症に気をつけよう



## 1. 全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

7月は腸管出血性大腸菌感染症（O157等）が27件、報告されています。

## 2. 定点報告感染症（感染症法における5類感染症）6月25日～7月29日

疾患名	市内流行状況		コメント
<u>咽頭結膜熱（プール熱）</u>	△	➡	市全体では、例年に比べ、あまり報告は多くありません。引き続き磯子区からの報告が多くなっています。
<u>A群溶血性レンサ球菌咽頭炎</u>	○	↘	高い状態での増減が続いていますが、6月中旬からは減少傾向です。都筑区からの報告が多くなっています。
<u>手足口病</u>	○	➡	7月から増えてきましたが、例年に比べ、あまり多くありません。瀬谷、港南から多く報告されています。
<u>伝染性紅斑</u>	△	↘	横浜市では、横ばいから減少してきましたが、全国では例年に比べ、報告が多くなっています。
<u>ヘルパンギーナ</u>	◎	➡	7月に入り、さらに増加してきたので、注意が必要です。青葉、泉、瀬谷、金沢等で多く報告されています。
<u>麻疹（はしか）</u>	△	➡	ほぼ終息してきました。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし  
 ➡：増加傾向、➡：横ばい、↘：減少傾向

## 3. いま流行っている病気とその予防法

- ・ 腸管出血性大腸菌感染症（O157等）に注意！毎年、夏期に多く発生していますが、今年は例年の発生数を上回る可能性があります。
- ・ ヘルパンギーナ、手足口病などの夏に流行する病気が増加しています。

食品は、中まで火が通るように十分に加熱し、生焼けの肉やレバ刺しなどは食べないようにしましょう。

手洗い・うがいを心がけ、タオルの共用はやめましょう。  
 トイレのあとは、石鹸でよく手を洗いましょう。



## 4. 夏休みに注意すること

- ・ 蚊にさされないようにしましょう。  
 日本脳炎予防ポスター [http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/pdf/nihon\\_nouen.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/pdf/nihon_nouen.pdf)  
 日本脳炎Q&A <http://www.mhlw.go.jp/topics/2007/07/tp0710-3.html>
- ・ 海外旅行では、感染症に注意しましょう。



詳しくは、夏休み期間中の海外渡航者に対する感染症予防について（厚生労働省）  
 をご覧ください

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou17/02.html>

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic\\_inf/kansen\\_khama.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic_inf/kansen_khama.html)

子供の感染症については、

こども青少年局ホームページ「こどもの病気とホームケアこどもに多い感染症編」

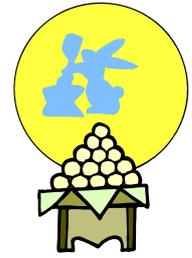
[http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo\\_kenkou/homecare.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo_kenkou/homecare.html)  
 をご覧ください。



横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

# 感染症に気をつけよう



## 1. 全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

8月は腸管出血性大腸菌感染症（O157等）が28件、報告されています。  
毎年、夏期に多く発生しています。今年は、すでに昨年の発生数を上回っています。

## 2. 定点報告感染症（感染症法における5類感染症）7月23日～8月26日

疾患名	市内流行状況	コメント
<u>百日咳</u>	○	成人の報告例が見られます。大人は、重症になることは少ないですが、感染源となる可能性があり注意が必要です。
<u>咽頭結膜熱（プール熱）</u>	△	今年のはっきりした流行が見られませんでした。今後は、横ばいが続くと思われます。
<u>A群溶血性レンサ球菌咽頭炎</u>	△	例年に比べて発生の多い状態が続いていましたが、現在は落ち着いています。秋から冬にかけて少し増えていくので、今後も注意が必要です。
<u>手足口病</u>	△	7月中旬から8月中旬にかけて小さな流行が見られましたが、その後は減少しています。昨年は秋に少し増えたので、今後も注意が必要です。
<u>ヘルパンギーナ</u>	△	7月末をピークに、現在は終息に向かっていきます。
<u>麻疹（はしか）</u>	△	ほぼ終息し、散発の患者報告がある程度です。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし  
：増加傾向、：横ばい、：減少傾向

## 3. いま流行っている病気とその予防法

- 腸管出血性大腸菌感染症（O157等）に注意！  
予防法については、「腸管出血性大腸菌感染症 O157に注意しましょう」をご覧ください。

[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/o1572007.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/o1572007.pdf)

- 百日咳の成人の報告例が多くなっています。  
咳が続いている人は、赤ちゃんに近づかないようにしましょう。

生焼けの肉やレバ刺しなどは、  
子どもには食べさせないように  
しましょう。



## 4. 注意すること

- 感染症の中には、日本脳炎のように蚊が媒介するものがあります。  
蚊にさされないよう、戸外では出来るだけ長袖・長ズボンにし、虫よけスプレーなどを使いましょう。  
日本脳炎Q&A <http://www.mhlw.go.jp/topics/2007/07/tp0710-3.html>
- 海外旅行では、感染症に注意しましょう。  
詳しくは、「夏休み期間中の海外渡航者に対する感染症予防について（厚生労働省）」をご覧ください。  
<http://www-bm.mhlw.go.jp/topics/2007/07/tp0724-2.html>

このページの詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生動向調査委員会報告」をご覧ください。  
[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/infc\\_surv.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/infc_surv.html)

子供の感染症については、  
こども青少年局ホームページ「こどもの病気とホームケアこどもに多い感染症編」をご覧ください。  
[http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo\\_kenkou/homecare.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo_kenkou/homecare.html)

# 感染症に気をつけよう



## 1. 全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

9月は腸管出血性大腸菌感染症（O157等）の報告が5件に減少しました。  
また、海外からの帰国者のデング熱が5件報告されています。

## 2. 定点報告感染症（感染症法における5類感染症）8月20日～9月23日

疾患名	市内流行状況		コメント
<u>A群溶血性レンサ球菌咽頭炎</u>	△	➡	まだ報告は多くありませんが、冬季にもピークが見られるので、今後には注意が必要です。
<u>感染性胃腸炎</u>	△	➡	昨年は、ノロウイルスの非常に大きな流行がありました。冬にかけて増えていくので注意が必要です。
<u>手足口病</u>	○	➡	7月中旬から8月中旬にかけて小さな山が見られましたが、その後は減少しています。秋に向けて少し増加しているため、今後も注意が必要です。
<u>百日咳</u>	△	➡	成人の報告例が見られます。重症になることは少ないですが、感染源となる可能性があり注意が必要です。
<u>麻しん（はしか）</u>	△	➡	まだ、散発で患者報告があります。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし  
➡：増加傾向、➡：横ばい、➡：減少傾向

## 3. いま流行っている病気とその予防法

- 腸管出血性大腸菌感染症（O157等）の報告数が、すでに昨年1年間の発生数を上回っています。予防法についての詳細は、「腸管出血性大腸菌感染症 O157に注意しましょう」をご覧ください。  
[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/o1572007.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/o1572007.pdf)
- 百日咳の成人の報告例が多くなっています。咳が続いている人は、赤ちゃんに近づかないようにしましょう。

生焼けの肉やレバ刺しなどを、子どもに食べさせないようにしましょう。



## 4. 注意すること

- 海外旅行、特にアジアからの帰国者にデング熱が目立っています。雨期にあたる東南アジアでは、蚊に刺されないようにすることが、唯一の予防法です。詳しい情報は、横浜市感染症臨時情報「東南アジアで、デング熱に感染する人が増えています！」をご覧ください。  
[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/dengue.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/dengue.pdf)
- 麻しんをなくしていくために、Ⅰ期(1歳)とⅡ期(小学校入学前の1年間)、2回の予防接種を忘れず受けましょう。
- 百日咳の予防のために、乳児は早めに三種混合ワクチンを受けましょう。



詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic\\_inf/kansen\\_khama.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic_inf/kansen_khama.html)

子供の感染症については、

こども青少年局ホームページ「こどもの病気とホームケアこどもに多い感染症編」をご覧ください。

[http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo\\_kenkou/homecare.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo_kenkou/homecare.html)

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

# 感染症に気をつけよう



## 1. 全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

10月は破傷風の報告が1例（4歳女子）ありました。  
レジオネラ症の報告が今年の3倍以上になっています。

## 2. 定点報告感染症（感染症法における5類感染症）9月24日～10月28日

疾患名	市内流行状況		コメント
<u>インフルエンザ</u>	△	➡	過去6年間の流行と比べて、最も早く増加の兆しが見られています。今後の動向に注意が必要です。
<u>RSウイルス感染症</u>	△	➡	例年、インフルエンザに先がけて流行が見られます。乳児や疾患を持つ幼児では重症になりやすく、注意が必要です。
<u>A群溶血性レンサ球菌咽頭炎</u>	△	➡	冬季のピークに向かって増加傾向が続いています。今後の動向に注意が必要です。
<u>感染性胃腸炎</u>	△	➡	過去5年間の同時期と比べるとやや多く、冬の流行期に向けて、注意が必要です。
<u>百日咳</u>	△	➡	成人の報告例が見られます。重症になることは少ないですが、感染源となる可能性があり、注意が必要です。
<u>麻疹（はしか）</u>	△	↘	散発で患者報告があります。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし  
➡：増加傾向、➡：横ばい、↘：減少傾向

## 3. いま流行っている病気とその予防法

- ・ インフルエンザに気をつけましょう。今年は、全国的に例年よりかなり早く集団かぜによる学級閉鎖等が報告されています。
- ・ ノロウイルスによる感染性胃腸炎は、主に秋から冬にかけて流行する感染症です。ノロウイルスの特徴を理解し、ノロウイルスによる感染を予防しましょう。最も有効な感染予防策は手洗いです。
- ・ 百日咳の成人の報告例が多くなっています。咳が続いている人は、マスクをしましょう。また、赤ちゃんに近づかないようにしましょう。

調理の前や食事の前、トイレの後などには、必ず手洗いを！



## 4. 予防接種について

- ・ インフルエンザの予防接種を受けましょう。横浜市では、高齢者の方がインフルエンザ予防接種を受ける場合、接種費用の助成を行っています。  
[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/influenza/influ\\_yobou.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/influenza/influ_yobou.html)
- ・ 麻疹をなくしていくために、Ⅰ期(1歳)とⅡ期(小学校入学前の1年間)、あわせて2回の予防接種を忘れず受けましょう。
- ・ 百日咳や破傷風の予防のために、乳児は早めに三種混合ワクチンを受けましょう。



詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic\\_inf/kansen\\_khama.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic_inf/kansen_khama.html)

子供の感染症については、

こども青少年局ホームページ「こどもの病気とホームケアこどもに多い感染症編」をご覧ください。

[http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo\\_kenkou/homecare.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo_kenkou/homecare.html)

横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>

# 感染症に気をつけよう



## 1. 全数報告感染症（感染症法における1～5類感染症）

11月は細菌性赤痢の国内発生例の報告が2例ありました。  
腸管出血性大腸菌感染症は秋になって減少しましたが、5例と報告は続いています。  
レジオネラ症の報告が今年の3.5倍以上になっています。

## 2. 定点報告感染症（感染症法における5類感染症）10月22日～12月2日

疾患名	市内流行状況		コメント
<u>インフルエンザ</u>	◎	➡	過去10年間と比べて、最も早く流行期に入りました。瀬谷、青葉、神奈川、港北、緑で多く報告されています。今後の動向に注意が必要です。
<u>感染性胃腸炎</u>	○	➡	昨年ほどではありませんが、11月末はかなり増加し、集団発生も報告があるため、注意が必要です。
<u>RSウイルス感染症</u>	△	➡	乳幼児の肺炎や細気管支炎の原因になります。報告が続いており、引き続き動向に注意が必要です。
<u>A群溶血性レンサ球菌咽頭炎</u>	○	➡	冬季の流行に向かって増加傾向が続いており、今後の動向に注意が必要です。
<u>百日咳</u>	△	↘	成人の報告例が見られます。成人では重症化はまれですが、感染源となる可能性があり、注意が必要です。乳児は早めに三種混合ワクチンを受けましょう。
<u>麻疹（はしか）</u>	△	➡	油断することなく、次の流行時に適切な対応がとれるように準備しておく事が大切です。

◎：流行、○：やや流行、△：散発、×：患者報告なし  
➡：増加傾向、➡：横ばい、↘：減少傾向

## 3. いま流行っている病気とその予防法

- インフルエンザに気をつけましょう。予防には、うがい、手洗い、マスクなどが有効です。今年は、全国的に例年よりかなり早くから集団かぜによる学級閉鎖等の報告が続いています。市内の最新情報は、下記をご覧ください。  
[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/2007nen/sokuhou.pdf](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/sokuhou.pdf)
- ノロウイルスによる感染性胃腸炎は、主に秋から冬にかけて流行します。ノロウイルスの特徴を理解し、ノロウイルスによる感染を予防しましょう。最も有効な感染予防策は手洗い（調理や食事の前、トイレや汚物処理の後など）です。



## 4. 予防接種について

- インフルエンザの予防接種を受けましょう。横浜市では、高齢者の方がインフルエンザ予防接種を受ける場合、接種費用の助成を行っています ([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/influenza/influ\\_yobou.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/influenza/influ_yobou.html))
- 麻疹をなくしていくために、Ⅰ期(1歳)とⅡ期(小学校入学前の1年間)、計2回の予防接種を忘れず受けましょう。来年4月より5年間、中1及び高3相当の年齢にも定期接種が実施される予定です。

詳しい情報は横浜市衛生研究所ホームページ「感染症発生状況」をご覧ください。

[http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic\\_inf/kansen\\_khama.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic_inf/kansen_khama.html)

子供の感染症については、こども青少年局ホームページ「こどもの病気とホームケアこどもに多い感染症編」をご覧ください。

[http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo\\_kenkou/homecare.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kodomo/katei/kodomo_kenkou/homecare.html)

横浜市感染症発生動向調査事業概要  
平成19年(2007年)

横浜市健康福祉局衛生研究所感染症・疫学情報課  
平成21年3月発行

〒235-0012 横浜市磯子区滝頭1-2-17

Tel 045(754)9815

Fax 045(754)2210

横浜市広報印刷物登録 第210028号

類別・分類 A - EC440